
そんな俺らのご当地ヒーロー

ブルートゥリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんな俺らはご当地ヒーロー

【Nコード】

N7203V

【作者名】

ブルートウリー

【あらすじ】

『謎の敵の襲来』、そんなSFな言葉が当たり前になってしまった俺の世界。今日も今日とて世界中の平和が脅かされ、各地のご当地ヒーローが懸命に戦う。けど、俺には関係ない。そう思っていたんだ、あの子たちに出会うまでは

プロローグ？ そんな俺と彼女の出会い

「今のアイアンクローからの投げ飛ばし凄かったです。まさしく脳天直撃という感じで……私、凄く感動しています」

目の前の女の子が頬に両手を添えて、もじもじと肩を振っている。その顔を朱に染めて……いや赤面ではなくリアルに。

「あれっ、もう夕方ですか。景色がオレンジ色に見えちゃいます」

「あっ……う、うわっ……」

メトロノームのように揺れ動く女の子。その危うげな挙動が、頭の活動を停止させている場合じゃねえぞと俺に湯を入れる。

「すみませんでしたああああああああ！　ほんと何とお詫びをすればいいか、と、とにかくすぐ救急車を！」

俺はポケットから携帯を取り出そうとするが、腕の方がバイブレーションしておりなかなか思うようにいかない。

「そんなに慌てないでください。かすり傷ですから」

女の子がにっこり笑った。見る者の心にこびり付いたストレスや負の感情を根こそぎ刈り取ってしまいそうな聖母の笑みで。だが……

「えええっ！？　どう見てもつべこべ言わずの病院コースですよ」
それは通常時の彼女ならの話。額や鼻や口元から滴る血がすべてを台無しにする。今の彼女の微笑みは心労を刈り取るどころか、新たな種を植え付けている。

「大丈夫ですって。私、これでもタフなんですから」

図書館の奥で一世紀前に出された海外の名著を読んでいるのがお似合いのインナー系の身なりで言われてもまったたく信用できない。

日本人形をリスペクトしているのか前髪がぱつとんと横一列になつており、後ろの方はみつあみおさげで落ち着いているのでワンアウト。

このクソ暑い夏の昼下がりにというのに茶色のジャンパースカートを着ているでツーアウト。

そこから出ている細腕がどんな日焼け止め塗っているのか不思議なくらい白く、おまけに汗の玉が一つもないのでスリーアウト。

「チェンジ」

「えっ？」

「あつ、ごめん。全然チェンジじゃないからね。むしろステイ、超ステイ」

この少女は蚊も殺せないほどの虚弱体質に違いない。俺の経験と偏見と勝手な妄想で構築された完璧な見立てである。

目に力を入れて垂れ流れる血をシャットアウトすればあら不思議、実におつとりした女の子になる。美人というほど大人びるわけでもなく、可愛いというほど子ども染みてもいない。その中間を剛速球で貫いたようなグッドな雰囲気は彼女は纏っている。もろタイプだ。何て言うの、「守ってあげたくなっちゃう！」という言葉がしっくりくるよね。

まあ、つい今し方……その守られNo.1の女の子の顔面にアイアンクローかまして地面に投げつけた俺が言うのも何だがね……

『夏が少女を大人に変える』

そんなキャッチフレーズを愛読しているグラビア誌で見たのが始まりだった。

高校二年生の夏、一生に一度の夏。内気なあの子も頑張っちゃう開放的なめぐりめぐり季節。

来年は受験や就職活動という足かせで羽を伸ばせないのは分かりきっている。楽しむなら今しかないじゃないか……俺が少女をエスコートしつつ共に大人の階段を上ってやる。

そう決意したのは一ヶ月前。

それから今日まで「いただきます」より「付き合ってください」を多く口にする生活を行ってきた。何としても夏休みまでに万年空席の俺の傍らに誰かを座らせたかった。

が、心をすり減らす日々の果てには何一つ残らなかった。撃沈だった。壮絶なる敗北だった。

「はっ？ マジ言ってるの。きゃははは、ないわあ」

「す、すみません。わたし他に好きな人が……」

「あんた最近色々な子に声掛けているんだって。そんな手当たり次第の馬鹿なんて誰も相手にするわけないでしょ」

「やめてください、大声出しますよ。せ、せんせえー！」

目を閉じれば聞こえてくる彼女達の馬事雑言。

うちの高校はツンデレばかりで困るわあ、秘めたる想いを吐き出せずに憎まれ口をついつい叩いてしまつとか物語の中だけにしたいわあ。まったく参っちゃまうぜ……ははっ、はは……は、はあ。

誰一人として俺に微笑みかけてくれる女の子は現れず終業式……

カルピスを薄めた液をさらにプールの水で混ぜたような長いだけの校長の話を契機に夏休みが始まってしまった。

夏休み一日目。俺は諦めていなかった。

狭い校内で彼女を見繕うとしたことが愚かだったのだ。面倒くさがってはいけない、視野を広げよう、足を伸ばそう、運命の八二一が待つ約束の場所は必ずある。

ナンパじゃあ！ ガールハントじゃあ！

狩りの場所は、俺の住む大松市の隣にある如月市の駅前。県内どころか日本でも五本の指に入る巨大遊園地を主軸に発展している如月市、その交通の基点となる駅前の公園はそりゃあもういつだって人ばかりだ。

レンガが敷かれた道の傍らには手入れの行き届いた花壇が並んでいる。公園の中央には噴水が設置されて、水滴の間に虹を作り出している。蒸し暑い夏に一太刀を浴びせるその様は実に清涼的だ。

まあ、噴水なんてどうでもいい。それより女の子だ。

おうおう、目移りしちゃうくらい沢山いるじゃないですか。床屋じゃなくて初めて美容院なるお高い店にも行ってきたし、今日の占いにあったラッキーアイテムの猫のキーホルダーも用意した。これでバッチリだ。

と、バッチリに行くのなら一七年間俺に彼女が出来ないわけがない。一〇〇人に声を掛ければ誰か引つかかるだおる、と甘い見立てをしていた俺は『ごめんなさい』の山を築くのみで、心をすり減らしていく。ひ、一人くらい立ち止まって話をしてもいいだろう。なあ……

そして、彼女に会った。

「あつ……」

ごみごみとした駅前でお宝発見。往来の激しい噴水の前に立つ女子に俺の視線は釘付けとなった。周りがセピア色に変わり、彼女だけが鮮やかな色合いで浮かび上がる。

「お、お、おじょうさああん!!」

記念すべきじゃない一〇〇人目。彼女はこれまでの九九人より魅力的だったのだ。少なくとも第一印象は俺の脳内審査員が拍手喝采するほどの出来だった。

「をおおじょうさああん!!」

絶叫に近い大音量で、人の流れを突破して女の子に迫る。

「はい？」

その子が俺の存在に気づいた。可愛らしい惚けた顔で俺を見る。

「ぜひいい俺とお茶などいかが、あがつ！」

何てことだろう。彼女と視線が合ったことに嬉しいあまり周囲の注意を怠ってしまった。

彼女の目前まで後一步というところで、小さな影が俺の行く手を横切る。

な、なんだあ！

それを無理にかわすも勢いだけではどうにもならず、前のめりに倒れかかる。

何かを掴んで体勢を立て直すのだ。

脳から信号が走る。腕が適当なものを探す。
で、適当な所にあつたのが女の子の顔だつた。
ぐわしつと五本の指がしつかりホールドする。

「ふえっ？」

指の隙間から声がするもそれどころじゃない。まだ足りないのだ。
これだけでは全力疾走の勢いを殺しきれない。

反動を付けて立て直せ、と再び脳からの指令が飛ぶ。

反動、反動……この状況でどうやって？ と悩んだのは一瞬。

「せいやっ！」

有能な身体が反射的に動いた。

「ぐぶえっ！」

反動は得られた……地面に叩きつけられた女の子の犠牲の上に。

女の子が女の子らしからぬ悲鳴を上げる。ボーリングのピンのよ
うに周囲の人を押しつけるようにごろごろ数メートル転がって……
最終的につつ伏せで止まった。

「……………」

騒がしかった駅前に沈黙が訪れる。誰もが突然発生したバイオレン
スな光景に度肝を抜かれたようだ。

…… やっちゃった、 やっちゃったよ俺。うら若い乙女なんて事を。
ラブコメに出てくる暴力ヒロインもびっくりのファーストアタック
かましちまったよ。

「あ、あの……」
全身で地球とハグしている女の子に恐る恐る近付く。

「だ、大丈夫ですか？」

大丈夫なわけないだろ、と自分で自分に突っ込みながらとりあえず定型句を述べる。女の子は微動だにせず地面と向き合ったままだ。

ひよつとして思った以上の重態なんじゃないのか、まさか意識不明とか……ひええ、手が後ろに回っちゃう。

俺の心配が募り募ったところで

「イイツ！」

突然むくりと女の子は立ち上がった、感極まった奇声と共に。

「い、いいっ」

同じ言葉なのにまったく違うイントネーションで後ずさる俺目掛けて、ズザザツと女の子が駆け寄ってきた。

「今のアイアンクローからの……」

「私、折旗希糸と言います」

「俺、有明努つす。よ、よろしく」

あああ、一〇〇人目にしてついに自己紹介までこぎ着けたというのに心が踊らないのはなぜだろう。

「努さんですか、良い名前……」

折旗さんは小さな口で味わうように俺の名前を反芻する。その仕草が可愛くてたまらない。

まだちょっと血が出ているけど、それ以外は文句の付けようがない良い子に見え

「私のことは豚と呼んでください」

「ごめんもう一度」

「豚と呼んでください」

「ワンモアセイツ」

「ですから豚と呼んでください」

「いきなりカミングアウトされてもすげえ困るんですけど」

「私、努さんの愛のこもった一撃を受けて「無視っすか」知ったのです。世界にはこんなにも素晴らしい刺激があるんだと。こんな事を初めて会った方にお願ひするのは恥ずかしいんですけど……その……ぜひ私をもっともつと鬨ってください、いたぶってください」

「ああもしもし……はい、はいそうです。救急です。ちょっと頭を強く打ったみたいで、何やらおかしな事を口走っています」

「ええっ！ 私の精一杯の告白をスルーした拳句に通報ですかぁ……で、でもそれはそれでイイツですよ、心に突き刺さるこの痛みもなかなか……はぁはぁ」

ほ、本物過ぎる。あかん、あかんですよ。いくら一人で夏を越えるのが空しいと言ってもこの子はダメだ。素晴らしい外見でも取り戻せないくらい内面に問題ありだ。

俺が望むのはハートマークがふわふわ浮いて『イチヤイチャ』擬音が鳴る甘ったるい空間だ。

折旗さんの未来には『ビシッバシッ』とムチがしなる濃厚なSM空間しか待っていない気がする。

俺は「す、すいません。今のなしです」と言って携帯を切った。折旗さんを病院行きにするのをやりすぎだと判断したのではない。

もし本当に救急車を呼んでしまったら、到着まで折旗さんをここに拘束しておかなければならないのだ。これ以上一緒にいれば何をされるか分かったものじゃない。

さつさとここを離れてナンパを再開したい。それが俺の切実な心だった。

「折旗さん、怪我の方は心配ないんだよね」

「怪我じゃないですよ。これは努さんが私に刻んだ愛の証です」

「……………っ、そうなんだ。じゃあ、俺忙しいから行くね」

もう限界。もう勘弁してください、どうしてそんな保護欲をそらせるような甘い声で、変態発言をするんだ。資源の無駄遣いにもほどがあるぞ。

「えっ……………せっかく巡り会えたのにもうお別れなんて悲しいです。せめて住所と電話番号とスリーサイズとソフトかハードどちらがお好みかを教えてください」

「ソフト？ ハード？」

「ちなみに模範解答はガチハードなので、お願いします」

「さよならっ！」

俺はビーチフラッグをするかのような見事な反転で折旗さんから逃亡を開始しようとした。

……………が。

ブローグ？ そんな俺と彼女と彼女の出会い

「きゃああああ！？」

噴水の外郭に座っていた人々が急に悲鳴を上げた。

駅前の時間が止まる。時計を気にしていたビジネスマンらしきスーツの男も、遊園地が目的と思われる家族連れも、公園を我が家になっているホームレスも誰もが何事かと噴水の方を注視する。

噴水のすぐ傍にいた人達がこちらに掛けてくる。みんな尋常じゃない形相をしてどうしたんだ？

「うわっ！？」

あっという間に人の波に巻き込まれる。そのまま流されれば折旗さんの元に逆戻りだ。

何があつたかは知らないが、後退するくらいなら前進した方がマシに決まっている。

男波は豪快にかき分け、女波はさりげなくボディータッチしながら俺はこの大波を乗り越えた。

視界が開ける。目の前には平和というフレーズの似合う噴水があるだけ。

「別に変なことなんて・・・んっ？」

今、水面が妙に盛り上がらなかったか。何か潜っている？ いや、水は澄んでいて底まで見える。異常なんて・・・

「えっ……ええっ!？」

また水面が盛り上がった。今度は一メートルくらいゆっくりと。そのまま噴水の囲いの外へと一部の水が這うように出てくる。

物理の授業を睡眠学習に当てている俺にだってこんな現象が現実
に起こり得ないことは分かる。ある例外を除いて……

「まさかシンキローか！」

うちの県じゃあ都市部でしか確認されていなかったのに。なんで如
月市に現れるんだよ。

シンキローには幾多の種類がある。噴水からのっそりとレンガ置
の上に着地したこいつは……RPGでおなじみの愛すべき
ザコことスライムに似ていた。確かニューズで観た気はするのだが、
名前を思い出せない。

その身体は個体と液体の間であるゲル状をしている。奴のいる
場所だけ光の通路が曲げられ、その先の景色が不気味に揺らめいて
いる。大きさは伸びたり縮んだり落ち着きがなくハッキリしないが、
大の大人をまるごと包み込むのも可能そうだ。

見たところスライムの動きは鈍速。とにかく離れてしまえば襲わ
れることは……

「い、いやあああー!!」

俺としたことがスライムにばかり気を取られて認識するのが遅れた。

噴水の横で尻餅をついている女の子がいる。俺の方からは背中しか見えないが、声からして若い。腰を抜かしたのか立ち上がることは出来ないようだ。

スライムは女の子に狙いを定めた。身体を擦りながら確実に迫っている。

どうする？

女の子を助けようとは思っていても自分まで餌食になりかねないぞ、それでも行くか……などという葛藤はなかった。

やることは決まっている。俺は即断した。

「気持ち悪いナリでその子に触るんじゃねえっ!」

疾走と同時に取り出したのは今日のラッキーアイテム。猫のキーホルダーを思いっきりスライムに投げつける。

走りながらの投球は不安定だったが、今日のナンパの不幸はこの一投を命中されるための試練だったと言わんばかりに見事スライムの中央部を射ぬいた。

ちやぶ、と音を立ててキーホルダーはスライムの体内に進入してそこで止まる。

唐突な異物にスライムは気を悪くしたようで、表情がなくても不快感が伝わるほど身体をくねらせる。

よし、女の子への進行を中断させた。

その隙を見逃す俺じゃない。

未だ動けない女の子の手を引つ張り無理矢理立たせると

「乗って！」

と短く言い背中を差し出す。

「は、はいっ」という返事のすぐ後から背中に重みが掛かる。

思ったよりも軽い……あと、期待していた胸の感触がやって来ない。

どんな状況でも男の本能を忘れない俺にとって、この結果は残念極まりないことだった。だが、嘆くのは安全地帯まで避難してからだ。

急ぎ立ち上がって、とにかく噴水から離れる。遠巻きにこちらを見ていた人達の所には行けない。彼らには囿になってもらう。

シンキローは種類に限らず、人から様々な栄養を摂取する。俺達は奴らにとって餌なのだ。当然、人の多い所にシンキローは移動するはず。だからあちらはダメだ。恐怖のDM女こと折旗さんもいるし……

人の集まるのは遊園地の方向、ならばその逆に行く。女の子を背負って駅前を出る。そのまま些か活気のない商店街に入ると

「も、もう追ってきていないみたいですよ」

頭の上から報告がもたらされた。

「そう？」一応自分でも振り向いてみるがスライムの姿はない。

「ふう……………」

俺は膝を付いて女の子を下ろした。

さて、いよいよだ。シンキローの危機は去った。ここからが本番なのだ。

俺が女の子を助けたのは、もちろん困っている人がいたら黙っていられないから、この身を犠牲にしても助けてやるのが正しき人の在り方だから……………つて。

そんなわけねえだろおおおおおおお！！

チャンスじゃないか。

ヒロインのピンチに颯爽と駆けつけるヒーロー。助けられた子はもう恋に落ちるしかない。先ほどの折旗さんみたいにリアル出血ではなく、恥ずかしさと照れくささから頬を赤くして「ありがとうございました。ぜひお礼をさせてください、もちろんどんなお願いでも聞きますよ。だって努さんは私の命の恩人なんですから、えへへ

へっ」「みたいなことを言っ……交際へと繋がっていくのだ。

ぐっへへへ。

襲われる女の子を目撃したあの一瞬でそこまでの未来図を描いた自分の煩惱が誇らしい。

「ご無事でしようか、お嬢さん」

顔の表情筋を酷使し、マンガなら口元に出るような笑みを作る。それを女の子に発射、これでどんな子もいちころだ。

「はい！ 本当にありがとうございますっ！」

大きな声で感謝する女の子は思惑通り羨望の眼差しを俺に向ける……が。

「子どもじゃねえか！」

思わず叫んでしまった。

何てことだろう。背中を見た時に若いと感じたが、顔をしっかりと合わせてみれば俺よりだいぶ年下だ。

大きな目に大きな口、顔のパーツは大きっぱに構成されており『とにかく元気だけはあります！』は伝わってくる。髪は何だろうね、

ポニーテールを目指しているつもりかもしれないが、現状はニンジンに付いているトンガリと同等だ。

背はかなり低い。一四〇センチあるかどうか。

こんな恋という感情さえ理解していないような小さい子とお近づきになっても仕方ない。

そう思って盛大にため息をつく俺に

「子どもじゃないよつ。あたしはもう中学三年生なんだからっ！とつくにレディの仲間入りしているよ！」

女の子が食ってかかる。レディと自称するわりには、子ども番組のマスコットキャラをプリントアウトしたシャツを着ている。もしかやツッコミ待ちなのか。

「えっ、てつきり小学生かと思ったんだけど……」

つい本音が出た。女の子の目つきが険しくなる。地雷を踏んじやっ
た……？

「ごほん、まあなんだ。大切なのは見た目じゃない、子どもと大人を区別するのは心だから。君が自分の身体についてコンプレックスを抱えることはないんだよ。もっと穏やかな心で自分を認めてはどうだろうか？」

「やっぱり子ども扱いしているじゃない！」
優しく諭したつもりだったが、火に油か。

それにしてもシンキローに襲撃されたばかりというのにこれほど活発になれるとは。見た目通り元気に溢れている。だからだろうか、

年下からこんなに粗暴な喋り方をされても不快にならない……
・あつ、やっぱり俺はこの子を子ども扱いしているのかな。

自分の不遇な扱いにびよこびよこと地団太を踏む女の子、頭の上のトンガリもよく跳ねる……あれ、そう言えばこの頭。見覚えがあるような……

「……あ、あつ！ あああつ！ お前だろ、さっき俺にぶつかりそうになったの!？」

「へっ?」

「駅前だよ。お前のせいでナンパしようとした女の子にアイアンクローをかましちまったんだぞ。せつかくタイプな子だったのに新たな扉を開いてしまって手が付けられなくなるしさ、どうしてくれる!」

「よく分かんないけど、お兄さんがナンパに失敗したのは分かった」「そこだけ理解するなっ!」

「まあまあ。じゃあ助けてもらったお礼にあたしがナンパされてあげるよ。えへん」

マセた女の子はわざとらしく咳払いをすると

「あたしは青空五花、もう一度伝えるけど、中・学・三・年・生、一・五・歳よ！ 五花って呼んでね。よろしくっ」

バックにヒマワリを召還せんとする爛漫な笑みを作った。

子どもにナンパの相手になられても……とふてくされかけていた俺だったが不覚にもちよっとときめてしまった。お、俺はロリコンじゃないのに。

し、仕方ないな。自己紹介に自己紹介で返さないのは大人げない。

「有明努。高校二年生、一七歳だつ。ま、まあよろしく」

今日で二人の女性と自己紹介を果たせたぞ。ナンパ初日としては悪くない成果なのではないだろうか。

片や性格、もとい性癖に問題あり。片や年齢に問題あり。というマイナス点に目を瞑れば。

「へえ努ね……じゃあトムって呼んであげる」

「英語の教科書の例題に出てきそうな名前で人を呼ぶなっ！」

「いいじゃない、トム……うん、悪くない語感よね」

あだ名を付けるなんてこいつ……俺ともしっかり仲良くなりた
いとでも思っているのか。けど、俺はもっとグラマーで色気のある
子と一緒にになりたいんだ。

「じゃあそういうことで。気をつけて帰るよ」

「あつ待ってよトム。あたし、まだちゃんとナンパされてないよ」

「しねえよ。俺はもっと年上が好みなの。あとトムって言うな」

話は終わりだ、俺は踵を返そうとした。

しかし。

「おいつ、足を引っ張るなよ」

歩みを妨害された。少し憤慨しながら五花の方を振り返る。

「はっ？ あたしそんな事してないよ。ああなになにやっぱりナ
ンパしたくなつたの？ まったく素直じゃないんだから」

「なわけあるかつ。いいからはなせっ……っ……っであれ？」

五花は直立してこちらと対面している。俺の足を掴んではない。
だったら、今俺の足に付いているのは。

「……………」

「……………」

視線を落とした俺達の間から言語というものが掻き消えた。

俺の足に纏わりついていたのは……

スライムだった。

「ぎゃああああああー！」

「いやあああああ！」

なぜここにつ！？ 五花と立ち話している時も一応周囲を警戒していたのに……はっ！

スライムの這ったと思われる濡れた形跡が俺の足下から商店街隅の排水路に続いていた。こちらの死角を使って接近してきたのか！ 何もそこまでしなくても手近な人を狙えばいいのに。

ずっとスライムの一部が俺の胸まで伸びてきた。触手のようで気持ち悪いこと山の如し。

「あ………」

触手の手のひらと言えいいのか分からないが、それに相当する場所に猫のキーホルダーが丁寧に置かれていた。

「ああどうも、これはご丁寧に」
キーホルダーが俺の手に渡される。

………やっべえ。

キーホルダーを投げられたことを滅茶苦茶根に持っていらっしやるよ。わざわざその恨みを晴らすために追っかけてきたみたいだよ。

「あ、あたし誰が助けを呼んでくる！」

閑散とした商店街、ほとんどの店がシャッターを下ろしているか、開いていても店先に人はいない。五花の提案は正しいことなんだろうが………

「待つてえ！」

俺は五花の腕を強く握った。

「何するの！？」

「お、俺を独りにしないでくれええええ！」

「はあっ！？ バカなこと言わないで。このままじゃトムは」

分かっている。分かっているんだ。このままでは俺はスライムに呑み込まれるなんてことは。五花みたいなお子さまじゃ何も出来ないだろう。もっと大人の助力が必要なくらい理解している。

けどなっ！

「めっちゃこえええっ！ うっ、うわっ！ どんどん這いあがってくる。ぎゃああああっ、助けてくれええええ！」

必死にスライムを引き剥がそうとするも、まったく足が動かない。雪の中に埋もれたみたいにしっかき固定されている。

「だから助けを呼ぼうとしているじゃない。早く手を離して！」

「独りはイヤだああ！ 俺を独りにしないでくれええええ！！ 誰も見てない所でスライムに取り込まれるのだけはイヤなんだあああ！！」

「落ち着いて、トムの方が断然子どもじゃないのっ………っ

てきやああああ！？ こっちの足にも絡み付いてきたああ。いやああああ！！ ぬるぬるするうう！！」

「そ、そうだ。五花！ ナンパの続きをしよう！」

「何よこんな時に！ ひゃあっ！？」

「青空五花さん！」

「は、はいい」

「お、俺とずっと一緒にいてくれっ。一緒に最期まで！」

「そんなプロポーズみたいなナンパがあるかあああ！ 大事な順序をスキップし過ぎじゃない！ きゃあああっ！！」

とうとうスライムは俺の腰、五花にとっては胸の辺りまで浸食してきた。

五花が泣きはらした顔で叫ぶ。きっと俺も同じような顔になっているだろう。

俺達の声聞きつけて商店街の人達が何人が周りにやってきたが、どう対処すればいいのか分からず途方に暮れている。

ああ……俺の人生、これで終わっちゃうのか。結局彼女一人出来ずに。

なんて終幕だよっ畜生……

「……」

五花が黙った。失神したようだ、死の瞬間まで恐怖に曝されるよりはマシかもしれない。

ごめんな、って言葉じゃ済まないけどそれでもごめんな。巻き込
んじまって……

俺はどうにもならない人生を嘆いて天を仰いだ。そこには夏を象
徴するような大きな入道雲が立ち上っていた。

幕間 市長室にて

「麗奈君、君は宇宙生命体シンキローが初めて発見されたのがいつか覚えているか？」

「かれこれ五年と四ヶ月前と記憶しております、市長。NASAの衝撃的な発表は全人類にとって忘れられないものです」

麗奈と呼ばれたスーツ姿の女性は透き通った声で、しかし芯のある整然さで回答した。

「そうだ。まだそれほどの日日しか経っていない。宇宙からの侵略など当初は映画の宣伝かレベルの低いデマではないかと嘲られることもあったが、今となっては誰もが信じて疑わない、宇宙生命体に……そして、ヒーローに」

大松市役所の市長室。

地元最大の権力者の部屋は、肩書きに合わない簡素なものになっていた。

マホガニー製の上等な机はない。権力を誇示するような調度品もない。達筆な筆遣いで書かれた市民憲章が、何とか部屋の最低限の品格を保たせていた。

市長室は大松市の財政を的確に示していた。

「昨日の夕方、隣の如月市でシンキローが確認されたようだ」

お世辞にも高いと言えない使い込んだ机に肘を付き、大松市長はため息を吐く。

「存じております。如月市は認められたようですね」

「シンキローが出没する場所は人の多い所、または何かしらの特色を持ち隆盛している所……そうだな。如月市はシンキローから発展都市として太鼓判を押されたわけだ。昨晚、如月市の市長から電話があつたよ」

苦苦しく大松市長は言う。

「やあ元気にしているかい、ははっ僕の方は大変だよ。ニュースで知っているかな……そうそうついに出ちゃったんだよねシンキロー。いやあ困った困った。これから緊急の会議さ、市民をシンキローの手から如何に守るかの防衛プログラムを考えなくちゃねでも、不幸中の幸いと言うべきかな……何と、ヒーローがもう誕生したんだよ。一回目の襲撃でヒーローが生まれるというのは、全国的にも珍しい。これも我々如月市民の日頃の行いというやつかね……おっとそろそろ時間だ、忙しい忙しい。大松市が羨ましいよ。平和で、のどかでね。くそっ！」

市長は劇団員顔負けの模写で電話の内容を再現し、最後の最後に自分の感情を怒声の形で噴出させた。

大松市と如月市の市長は大学時代からの同期であり、長年勉学にスポーツに職務で争い続けてきた。恋のライバルでもあつたという話も立つたこともあるが、それを確かめようとした者はいない。とにかく二人は筋金入りの犬猿の仲である。

それを知っている麗奈は下手な慰めはせず寡黙な秘書として、市長の機嫌が自然沈下するのを待つ。

しばらく顔を下に向け、震える拳を机に押し付け、大松市長。そのバーコード頭の向けられる先が麗奈から天井に変わるには一分ほどかかった。

「シンキローだけならまだ良かった。なのによりにもよってヒーローだ。しかも目撃証言によれば華やかな衣装のうら若い乙女というじゃないか！」

「俗に言う魔法少女タイプでしょう。もっとも人気がある部類です。これは困りましたね……………」

「奴は防衛会議と言っていたが、そこには観光課の人物や遊園地の関係者も参加すると思うかね？」

「十中八九そうでしょう。今やヒーローは市町村の重要な収入源です。グッズ化するの当然、遊園地のヒーローショーに取り入れられるのも目に見えています」

「ご当地ヒーローか……………」

大松市長はイスから立ち上がり、窓側に寄った。暖かな陽光に照らされた大松市の町並みが広がっている。民家よりも畑の割合が多い町並みであるが……………」

市役所前の通りだと言うのに車の姿はまばら。通行人は全員高齢者である。

「如月市ではなく、この大松市こそヒーローが必要不可欠だとワシ

は思う。近年の過疎化をはねのけるのはヒーローという劇薬なのだ
よ」

「劇薬、ですか」

麗奈は眉を下げた。

劇薬は効果はあるが、使用頻度を間違えれば身体を危険な状態に誘う。ヒーローが現れるということはシンキローも現れるのだ。シンキロー退治をヒーローに丸投げして行政が何のアクションも取らない……なんてことが許されるはずがない。

こちらはこちらでシンキローの脅威から市民を保護するよう努力しなければ。しかし、現状の大松市の脆弱たる体制でそんなことが出来るかと聞かれれば首を横に振るしかない麗奈だった。

もっともこんな心配はまったくの杞憂である。人口は流出し続け、これと言った取り柄もない大松市はシンキローにとってまったく美味しくない獲物なのだから。

「朝から憂鬱なことを考えてしまったな。さあ気分を変えて仕事だ。麗奈君、今日の予定はどうなっている？」

「午前はまちづくりの懇談会に出席し、その後老人ホームで入居者との交流となっています。午後は……」

麗奈が初めて言い淀んだ。沈黙は一秒もなかったが、心中で葛藤は確かに起こっていた。それが証拠に声のトーンをやや下げて次の言葉は発せられた。

「のほほいランドの視察です」

のほほいランド。開園から三〇年という歴史ある遊園地である。大松市の郊外に建てられ、一時期は地元民と大勢の観光客で賑わった場所だ。

しかし、一〇年前に作られた如月市の巨大遊園地によって客入りは激減。今では大松市のなけなしの財政をさらに削り取る負債となっていた。

「……ヒーローがいれば。ヒーローさえいればのほほいランドも」

大松市長は目頭を押さえて呟いた。

「確かにのほほいランドは大飯喰らいだ。しかし、市民の誰もがあの場所に小さくはない思い出を抱いている。ワシとて以前は家族を連れてよく遊びに行ったものだ。息子や娘がのほほいランドの遊具ではしゃいでいて、見ているワシまで楽しくなった。麗奈君、ワシはね……あの場所にそれなりの愛着も持っているんだよ」

「市長はのほほいランドを潰さず、再建する道を行くというのですか？」

「ああ、そうだ」

大松市長は力強く、そして深く肯いた。

「ヒーローの登場で如月市の遊園地は勢いを強める。のほほいランドは終わりだ。この状況を打破するには……」

麗奈は謹直な佇まいを一層正した。それだけ市長の瞳にはえも言われぬ迫力が湛えられていたからだ。

「ヒーローを作るのだ。生まれるのを待つのではなく、この手で作る」

一話 そんな俺とバイト仲間

「姉御、おはようございます」

控え室に入った俺は、先に来ていた女性に向かって体を直角に曲げるお辞儀をした。

「おう有明。おはよ……って何その肌！ めっちゃ生まれただじゃん。どんなファンデーションしたんだよ、お前！」

姉御こと柴国亜里沙さんが急速に間合いを詰めてきて、俺の頬に人差し指突きを抉り込ませてくる。

「ひたつ、ひいたいつす姉御」

「めっちゃプニプニやん！ 昨日まで普通だったのに、何やったらこうなる!?!」

常時ガンを付ける目つきの悪さで姉御がこちらを睨む。

「ああ……それがですね」

距離を取って姉御の指から逃れた俺は一息つく。

「ニュース見ました？ 如月市の」

「ああ、シンキローが出た！ ってやつだろ」

「そうです、それぞれ。実は昨日……」

俺は話した。如月市の駅前での一〇〇人斬り（成果なし）から始まり、シンキローの出現、それに取り込まれたこと……折旗希系の部分は気分が滅入るので省き、青空五花を巻き込んだことは姉御にシバかれそうなので秘密にした。

「なっ、お前シンキローにやられたんかよ！ だらしねえなあ。あたしならワンパンで終わらせてやるのに」

シンキローを倒すと軽く言っちゃうなんてさすが姉御！ 長い手足から繰り出される美技の数々、それらの第一人者（被害者）である俺にはそれが強がりや冗談には聞こえない。

姉御はボーイッシュな髪型と、一七〇センチ弱の体格で腕っ節もある。昭和に高校生活をやっていたらスケバンとして名を馳せただろう。生まれた時代を間違えたな姉御。

「で、そんな負け犬のお前が五体満足でここにいるのはなぜだ？」

「そのシンキローがですね、シブヤって名前の奴でして」

シンキローの名前は基本的に初めて出現した場所の地名が採用される。この場合は東京都の渋谷となる。

「シブヤ……えと、それって何だっけ？」

「別名アカナメっすよ」

「あああ！ そいつかよ。危害を加えるどころか迷える女性の味方って言う」

三年前の渋谷事件は日本を、特に美容業界を震撼させた。突然現れた未知の生物に渋谷の若者が次々と赤ちゃん肌にされるといって、まったくおぞましくも痛ましくもない事件。むしろその日渋谷に行かなかったことに全国の女性達がハンカチを噛んで悔しがったそうだ。

「皮膚の垢やシミが大好物な奴みたいで、それに取り込まれればこの通り。おまけにあのゲルの中に浸かっていたせいで肌が異常に潤ったわけっす」

シブヤは出現頻度が低い稀少シンキロー、その特性を研究したい多くの機関から懸賞金が賭けられていることを昨晚病院で聞かされた。

夏の入道雲の白が視界全体に広がったと思つたら、それは病室の天井。俺は病院のベッドに寝かされていた。気を失っただけで障害はなし。

シブヤは獲物に極力傷つけない性格で、こちらが呼吸できるよう器用に口の部分だけを除いて対象を包み込む、と言うのは医者を受け売りだ。シブヤに限らずシンキローの多くが人間を無闇に殺しはしない。その理由には幾つかの仮説があるが、ポピュラーなものとして乱獲によつて人類を絶滅させては元も子もない。だから手加減しているのではないか、そう言われている。サバンナのハンター以上に倫理性を兼ね備えたシンキロー達の飼育小屋の中で地球は譲歩された平和を享受しているわけだ。

ともかく俺は簡単な精密検査を終えてその日のうちに家路に着くことが出来た。肌が綺麗になったのは望外の幸運、これでナンパの成功率が上がるぞ。まったくシブヤ様様だぜ。

「なあ猫に小判って知っているか」
「はっ!?!」

自分の頬をさすりながら悦に入っていた俺は姉御の不機嫌なオーラを読み取るのに遅れた。

「意味ねえよな。お前みたいな奴がスベスベになって誰が得するんだよ。あああ！　　つたくやり切れねえ……………」

ガツンと部屋に大音量が響く。姉御の足が机を蹴った音だ。ちなみに机はその衝撃で壁際までスライドした。結構な重さがあるのに……………

「有明よ、もしな嫌なバイトが始まるに当たってさあ今日も頑張りますかねえって自分を騙し騙しに元気付けている時にだな……………
・無駄に綺麗な肌をしたバカ面の舎弟がやって来て、くどくどと自慢話を披露してきたらお前、どう思う？」

「そつ、それは……………」

「ムカツカネ？」

「む、むかつくつす」

「だよな、そうだよな。ああ、良かったぜ、お前にあたしの気持ちがかかって。じゃあ次にあたしがどうするのかも分かるよな？」

姉御の右手が閉じられた。手首の血管が浮き出てきている。

バイトの前に強制的な胃の洗浄をしなければならないようだ。慣れてしまった理不尽に俺は嘆くことさえ放棄して、せめて多少痛みを和らげるために腹筋に力を入れる。

「主人の機嫌を損ねる猫はお仕置だ。おらああああ……………」

ガチャ。

「おはようございます」

「あああああらっ、おはようございます、陽之介君。今日も良い天気ね」

「すみません柴国さん、来る途中で親とはぐれた子どもがいたので……その子の親探しをしていたらギリギリの時間になってしまいました。すぐ着替えます」

「いって気にしないで。それより人助けをするなんてさすがね。陽之介君の出番は後だからゆっくりで大丈夫よ」

新たな人物の登場に姉御が鬼から仏へと急転直下のシフト変更を果たした。

「そう言ってもらえると気が楽になります。ありがとうございます、柴国さん」

「ふふふ、それより私のことは亜里沙って呼んでって言ったでしょ。クラスメートなんだからもっと親しみを込めてさ」

「ど、努力します。では……ん、どうした努。そんな目を閉じて歯を食いしばって。具合でも悪いのか？」

瞼を上げると、そこには親友の心配そうな顔が。

高津陽之介。俺の幼なじみである。様々な書籍やソフトによると幼なじみと言えば世話好きの女の子と相場が決まっているが、悲しいかな俺の幼なじみは男だ。

「ああ、今まさに走馬燈の開演ベルが鳴り響くところだった……」

俺は頭一つ高い長身の陽之介を見上げながら、不景気な声を出す。

「んう？」

俺と姉御のやり取りなど露知らない陽之介は、角刈りの頭を掻きながら首を捻る。

そんなどうでもいいポーズさえ絵になっていやがる。陽之介はスポーツ万能とか成績優秀とか眉目秀麗とかそんな吐き気を催す言葉で語られる類の良い男……と世間では言われている。俺としては大いに疑問がなつ。

こいつとツルんで幾星霜、一緒に遊びに行けば八チミツを塗りたくった木に群がる昆虫のように女の子がホイホイと逆ナンしてくる。ちなみに隣で必死に「そんな奴より俺とエンジヨイしようぜっ」とアピールする俺は毎度存在しないものとして女性達の視界にも入れてもらえない。

劣等感に身を任せ夜道で陽之介を背後から強襲してやろうか、と妄想したのは数え切れない。だが、未だにそれを実行しないのは偏に俺が大人だからである。無意識に嫌みを振りまくダメな幼なじみだが、それを許容するのが器の大きい男なのである。間違っても陽之介が空手の有段者で返り討ちにされるのが恐いから襲わないとかそついう理由ではない。

「有明君ったら昨日色々あったみたいで調子悪いのよね。仕方ないから私が介抱していたの」

「え、ええっ」

陽之介の毒牙にかかった一人の女の子が、ここぞとばかりに好感度アップに励んでいらっしやる。

姉御、加害者のくせにその嘘は人間的にあまりに下劣ですぜ。こは姉御の更正のためにもきちんと真実を述べ

「そ・う・で・しょ（ギロツ）」

「はい、まったくもってその通りでございます。その節は誠にありがとうございます」

長いものに巻かれるのって大切だよね。それにしても人って眼で殺せるんだなあ。さっきトイレに行ってて良かったなあ。

普段の姉御はこの世のすべてを足に使う唯我独尊な女傑だが、陽之介の前だけは幾重もの猫を被り、さらに己の内面を分厚いベールで隠してしまう。「この世のすべて気にいらねえ」と語る残虐性溢れる眼差しは春の世の夢の如く消失し、キラキラと輝く大きな瞳に様変わり。女は化粧をせずとも化けられるのだと姉御は教えてくれる。まさにぶりっこ・オブ・ぶりっこ。姉御が派手な服を避けたり、髪を伸ばさず短くしているのも陽之介の好みに合わせたたえまぬ努力の片鱗なのだ。

「おおい、バイト。いつまで油売ってんだ。早く準備しろっ」

奥の部屋へのドアが開き、厳つい男性のスタッフさんが顔を出した。

「はあい、わかりましたあ！」

そちらの方を向いて明るく返す姉御。

「ピイイ!? じゃ、じゃあ頼むぞ」

真冬の湖に突き落とされちゃいました、と言わんばかりの引きつった表情でドアを閉め消えるスタッフさん。

俺と陽之介の位置からは姉御の返事は聞けても、姉御が如何なる顔で返事したのかは分からない。陽之介との楽しいひとときを邪魔されて怒ったとはいえ、大の男に「ピイイ」と叫ばせるなんて一体どんな形相だったのだろう……。いや、想像してはダメだ。してしまったらスタッフさん同様今夜はまともに寝付けなくなるぞ。

「じゃあ陽之介君。私そろそろ出番だから行くね」

姉御は俺を存在しないものとして処理し、陽之介との別れを惜しみながら去って行った。うん、慣れていくからこんなくらいじゃ傷つかないぞ。

二話 そんな俺とヒーローショー

「そんな事より子どもは助かったのか？」

更衣室。

シンキローの一件を聞き終えて、陽之介が最初に口にしたのはこうだった。

俺がシンキローの被害に遭ったことを「そんな事」で片づけ、一緒に取り込まれた子の方を気にしている。シンキローの被害者ってもっと同情されるものと考えていたが、俺の扱いはいつもとまったく変わらない。

「そう言えば病院にはいなかったな……………」

衣装に袖を通しながら答える。五花に巻き込んだことを謝罪しようと病院を探したのだが発見出来ず、白衣のお姉さんに尋ねてみると「青空五花さんですか？ そのような方は来ていないようですよ。運び込まれたのは有明さんだけですから。お役に立てずすみません……………えつ、電話番号ですか？ ふふふ、構いませんよ。はいどうぞ」という具合に成果はなかった。個人的に小躍りしたくなる成果はあったが。

「不思議だな」

「うん、まさか消費者金融の電話番号だったとは……………なぜ看護師さんがそんな番号を……………」

「えっ?」

「あつ、なんでもない」

しばらく看護師さんをナンパするのはやめておこう。危つく契約させられるところだった。

「不思議なのはその子がなくなったことだ。努はその子が気絶するのを見たんだろ。無事だと良いんだが……シブヤに取り込まれてただでさえ瑞々しい肌をさらに潤わせていようものなら……なんて事だ」

陽之介が変な方向に熱くなってきた。完璧超人として学校でもてはやされるこいつだが、俺のように長年共にしている間柄のみ知っている悪癖がある。

「陽之介……」

もうすぐ出番だというのに暴走されてはたまらない。強制的に落ち着いてもらおう。

「今の話。散々子ども子どもって言ったけど、その子は女だ。男の子じゃない」

「……な、にい」

眼球の炎が一気に鎮火され、陽之介の背中から上がっていた熱気が霧散した。

「そ、そうか……そうなのか……い、いや男の子だろうと女の子だろうと心配なのは変わらない」

「ほんとうにい？」

真っ白に燃え尽きたボクサースタイルでうなだれて言われても説得力は皆無だ。

「あ、当たり前だろ」

「さっき迷子を助けていたんだよな、その子は男オア女？」

「たまたま男の子だったか……」

「もし女の子だったら手を貸した？」

「……もちろんだ」

今の間がすべてを語っている。

「おっと、もう時間じゃないか。さあ今日も頑張って子ども達を楽しませよう」

着替え終わった陽之介が、俺を避けてそそくさと更衣室を出て行く。

高津陽之介。スポーツ万能、成績優秀、眉目秀麗な完璧人間。

しかし、シヨタコン。

「はあい、みんなあ！ 今日のはほいランドに来てくれてどうもありがとうー！」

ステージに立った姉御がマイク片手にご機嫌な挨拶をする。

色とりどりの花々がプリントされたＴシャツ、サスペンダーで繫いだホットパンツを可憐に着こなしている。健康的であるものの若干の色つぼさも忘れない、実にポイントの高い格好である……というのは姉御を知らない人の感想で、内面を見せ付けられている俺としてはあまりのギャップに吹き出すのを毎度堪えなければならぬ。

「みんなのはほいランド楽しんでる？ 今日は暑いからお水をよく飲もうねえ。売店に冷たいジュースがたくさんあるよ」

辺り触れない話兼宣伝をする姉御。その姿からは本来の凶暴性はまったく見られず、子ども番組の司会をするお姉さんさながらだ。

のはほいランドのヒーローショー、その役者。それが俺と陽之介と姉御のバイトだ。

実入りの良い働き先を探していた俺がまずこのバイトを始め

次に「勉強と部活に励むべき高校生が金儲けなんぞするもんじやない」と固いことを言っていた陽之介が、ヒーローショーに出れば男の子達からの歓声を一身に浴びれることを耳元で囁いただけで「

バイトも立派な社会勉強だな」と清らしいほどの手の平返しを見せ
て加入。

そうしたらオプシオンで姉御も付いてきた。陽之介に好印象を与
えようと日夜行動している姉御が、同僚なんていう美味しいポジシ
オンを見過ごすはずがなかったのだ。

今でも覚えている。陽之介がバイトをすると決意した翌日、司会
役をしていた女性が「ごめんなさい、もう私には無理なんです。バ
イトやめさせてください」と泣きながらスタッフの人に謝ってい
た。

で、三日後には空いたばかりの司会者席に「ガキの相手なんてう
ぜえ……あつ、陽之介君。私もバイト始めたの。えへへへ、お互い
慣れてないけど頑張ろうね」と笑み浮かべる姉御が収まっていた。
一体何があったのか、それを詮索するほど俺は命知らずじゃない。

さて、姉御のトークも一段落したところで俺の出番だ。

『ぐわっはっはっはああ!!』

とステージ端に取り付けられたスピーカーからだみ声が流れ出す。
あらかじめ録音していた怪人のものだ。それに合わせて雪男のよう
な毛むくじやらの着ぐるみを着た俺が登場する。

「きゃああ！ あなたは何なんですか!？」

姉御が乙女な慌てぶりを晒す。さすが普段から仮面を付け換えして
いるだけあって演技力が高い。

『うるさいっ！ このステージは俺様が乗っ取った！ 抵抗するん

じゃないぞ』

音声の進行と共に俺は姉御の手を掴んだ。

「やめてえ、離して」

というのが姉御の台詞であり、俺の心境。

こっちだって仕事でなければすぐにでも手を振り払って数メートルは距離を置きたい。少し握る力が強かったり、手以外の場所を触ってしまえば控え室が俺の血で染められることになってしまうのだ。

「み、みんな。こうなったら私達のヒーロー、マツレンジャーを呼びましようー!」

マツレンジャー……のほほいランドの平和を守るために戦う正義の味方であり、のほほいランドのグッズ売り上げに貢献するマスケットキャラである。ちなみに名前の由来は大松市から取られている。

「私がせうのって言ったら大きな声で『マツレンジャー』って叫んでね」

『さつきからつるさい奴だな。お前から食べちゃうぞ』

「みんな! お願い、一緒にマツレンジャーを呼んでね! せうの」

「マツレンジャー!」

「……………」

「ちょ、ちょっと声が小さいかな。もう一度いくね、せいのっ」

「マツレンジャー！」

「……………」

「も、もうちよつと声を出そうね。そ、それじゃあ聞こえないぞ、お姉さん食べられちゃうぞー。せいの」

姉御の声だけが木霊する。追従する人はいない……と、いつか。

客がほとんどいない。

ステージを囲むように扇状に作られた観客席、しかも段々畑仕様になっていて。最大収容人数二〇〇人はくだらない。それが今や、両手で数えられる程度しか埋まっていないのだ。

ああ、前段にいる男の子が下を向いて恥ずかしそうにしている。分かる、分かるぞ。あまりにシユールな光景を見せ付けられて客なのに居心地の悪さを感じているんだろ。凄くよく分かるぞ。でもな、そんな状況でステージに立たされている俺や姉御のことを考え

てくれ。着ぐるみで顔を隠せる俺は良いんだ、姉御なんて野ざらしの顔で涙目になることさえ出来ない。それでも台本通りに進めようと必死になっているのだ、ぜひ姉御に愛の手を差し伸べて欲しい。

「マツレンジャー!」

「ま、まつれんじやー」

ようやく反応があった。が、どれも野太い声。スタッフの方々が舞台裏から回りこんで観客に紛れて声を出しているのだろう。そこまでするならマツレンジャーの登場シーン変えようよ。満員の観客が珍しくなかった昔のようにいかないのは誰だって分かるだろ。

『まてい!』

威勢の良い叫びと共に満を持して主役のご登場だ。

全身赤タイツというヒーローショーかテレビの中でしかお目にかかれない、かかりたくない我らがヒーロー『マツレンジャー』推参である。有象無象の戦隊ヒーローと区別する手段として、額の所にデフォルメされた松が描かれている。それ以外は特に特徴のない地味なヒーローだ。

『来たな、マツレンジャー。今日こそお前を地獄に送ってやるぞ』

『その言葉そっくりそのまま返してやる』

などというテンプレートな文句を消化して、俺とマツレンジャーの中の人である陽之介は向かい合った。

姉御はステージの隅に引き、中央には一体のヒーローと一体の怪

人が決戦の火蓋を切ろうとしている。

普通ならば前哨戦として、群がる雑魚戦闘員をヒーローがちぎっては投げちぎっては投げる派手なアクションが繰り広げられるものなんだけど……すべては経費削減。

ヒーローショーの集客数から分かるようにこのほほいランドは経営破綻一步手前の危険な状況なのだ。無駄は極力なくさなければならぬ。おかげで戦隊ものをモチーフにしているのにヒーローは赤のみであるし、相手は怪人一体だけ。

この盛り上がり欠けるショーを熱くさせるのは役者の演技しかない。それ故の陽之介であり、俺なのだ。

幼い頃から空手を習っている陽之介は、タイツ越しにでも分かるほど筋肉質な身体をしている。その手足から放たれる攻撃は雷の如く、遠目で見ていたとしても思わず仰け反ってしまうほどの迫力を出している。

対して俺はとにかく大きな動きで見栄えをよくする。跳び上がったのし掛かったり、地面をごろごろ転がったり……真夏の着ぐるみ内は蒸し風呂状態だが、元来無駄に体力があると称される俺なら問題ない。次々とリストラされるバイトの中で生き残ったのは伊達ではないのさ。

『ぐはっ！』

マジレンジャーのジャンピングキックが炸裂して、俺はステージの半分を使って吹き飛んだ。

『大丈夫だったかい？』

「ありがとう、マジレンジャー」

その隙にマジレンジャーが姉御を救出する。いつもながらこの時の姉御は素で幸せそうだ。マジレンジャーを強く強く抱きしめて胸に顔を埋める……こんな台本にはないのにな。

「抱擁するなんぞ子どもには刺激があり過ぎるのではないか？」と言っていたヒーローショーの責任者さんの末路はヒーローショーに携わる者達の間では禁句になっている……部署変更したみたいだけど、ちゃんと人と目を合わせられるまで回復したかなあ。

『くそお、マジレンジャーめ』

しぶとく起きあがった俺はマジレンジャーの方ではなくステージの外、観客席へと足を踏み入れた。ショーを燃え上がらせるために薪をくべるのだ。

昔からこのヒーローショーは観客参加型。お客様に人質になってもらうようにしている。これもさっきのマジレンジャーを呼ぶ掛け声と同様に悪しき風習だと思う。だって、参加してくれる人がなかなか見つからないんだもん。

まず原則としてステージに連れていくのは子どもが良い。大人では羞恥心が邪魔をしてヘラヘラした人質役となってしまう。場が白けて興ざめである。けど、子どもならノリノリで人質になるか、または自分から怪人と戦おうとする。他の観客はその微笑ましい光景に一層ショーに集中するというわけだ。

が、どの子でもステージに立つてくれるとは限らない。怯えたり恥ずかしがって拒否されることもザラだ。人質選びに時間がかかれば退席してしまうお客さんまで出てくる。迅速に適切に、俺にとっ

てこのプロセスが一番嫌な場面だ。

さて、今日は運の良いことに前の席の方に小学生くらいの子がいたな。人質が男の子となると、陽之介の動きが目に見えて良くなってさらにステージに熱がこもるのだけど……。快くステージが上がってくれるかな。俺は不安を胸にのっそのっその男の子に近づく。

「ごめんねえ、ちょっと一緒に来てくれないかな？」
着ぐるみの中から男の子だけに聞こえるような言葉をかける。

「……………」
あれっ、眉を八の字にして俺を無言で見つめている。こっちを怖がっているのかな？

「心配いらないよ。痛いことはないからね」
なるべく優しく言う。そこまでして俺は奇妙なことに気づいた。

どうしてこの子は一人きりなのだろう……………？

親兄弟や友達はいないのか。こんな小さい子が単身観客席にいるのはよくよく考えればおかしい。近くにお客さんは座っておらず、関係者らしき人はいない。まさか迷子？

「……………」

男の子が俯いた。そう言えばさつきも俯いていたな。シユールな光景に気恥ずかしくなっているのかと思っていたが、どうも様子が変だ。恐怖している………？

次の瞬間、起こったことは昨日のシンキロー騒ぎに勝るとも劣らない衝撃だった。

「あんぎゃああああっ！」

俺の甲高い絶叫が着ぐるみを突き抜けてステージ全体に浸透したくらいなのだから。

手が伸びてきた。

男の子が座っていたイスの下から、手が。

それは毛が敷き詰められている着ぐるみを強烈な力で捕らえた。

「また会えましたね」

「で、でゆえたあつ!?!」

忘れてたくても忘れられない強烈な存在感を俺の脳内に叩き込んだ怪女、折旗希糸さん。彼女が男の子の股下から顔を出して、こちらを見上げていた。

三話 そんな俺とDMな彼女

折旗希系さん。

神出鬼没という言葉は自分のためにある、と言わんばかりのいきなりの登場だった。

男の子の股下でうごめく日本人形チックな髪の毛は、怪異性抜群だ。インチキ霊媒師でも何でもいいからお払いを頼みたい、虎の子の一〇〇〇円あげるから早く！

「お、お姉ちゃん、もういいかな？」

ソロソロと立ち上がって距離を置く男の子。

「ええ、お疲れ様。お礼のジュースとカキ氷代です、あつちにお父さんとお母さんもいらっしやるから迷子にならないように気をつけて帰ってくださいね」

「ありがとう。じゃあ僕行くね……」

すべては仕組まれていたのか。男の子は俺を釣るための餌……折旗希系、恐ろしい娘！

つかなぜここに、どうやって俺の居場所が分かったのか。その理由を聞き出したい、けど聞き出したら余計に追い詰められそうで怖い、ああままならねえ。

「あつ、その怪人の人」

「んっ？」

「お姉ちゃんは本気だよ。強く生きてね」

男の子は去り際の台詞は俺の胸を貫通した。ふてぶてしい表情の着

ぐるみの中で俺は泣く。

「では、努さん」

折旗さんが背中を預けてきた。そして、俺の手を取って自分の首に巻きつける。

変態少女は拘束プレイがお好みようだ。

「エスコートをお願いしますね」ボソツと麗らかな声色で囁くのは反則だと思う。この子は変態、この子は地雷、そう強く言い聞かせないと根が素直な俺の煩惱が尻尾を振って折旗さんに従ってしまう。

折旗さんを連れて、いやむしろ折旗さんに連れられて再びステージへ。

『くそつ、卑怯だぞ！』

マツレンジャーの音声が鳴るということは裏方のスタッフさん達が続行を決めたということか。正直、ショーは中止した方がまだ傷が浅く済むと感じる。どうせ客なんてもうほとんどいないしさ。

「すみません、もう少し力を入れて首を絞めてくれませんか？ 全然息苦しくありませんし、頭が朦朧してこないのです。もっと本気を出しましょう、昨日の努さんよカムバック」

こんな異物を混入させてしまったんだ、もう台本を辿れる自信がないぞ俺は。

『ハハハ！ マツレンジャーよ。人質を返してほしかったら大人しくするんだな』

気持ちがどん底に沈もうとも身体はいつも通りの行動を取りたがる。俺は折旗さんの拘束を解いて後方へ押した。

「なっ、何をするのですか？」

「いいからここにいて。ショーが終わるまでじっとしていること！
分かった？」

「……それはフリですか？」

「ちげえ！ なにいらぬ所で芸人魂発揮しようとしてんの！」

「じゃあ放置プレイで私の妄想力を鍛える気なのですね？」

「あんたはとつくに免許皆伝だよ！ ドM道場開いて自分を含む全
国のMを集め隔離してくれ」

ダメだ、これ以上関わったら俺の中の何かが壊れそうに気がする。
女の子には優しく、特に美人は国宝級の扱いを。それが俺の信条
なのに……折旗さんはその人生の柱をカリカリと喰い削っ
ていく。

女の子相手にここまで言葉を荒くするなんて今の俺はどうかして
いる。このままじゃ折旗さんが望むサド野郎になってしまいそうだ。
くそっ、思う壺ってやつが手招きして新世界へと誘ってやがる。
出来るだけ折旗さんとの接触を控えないと……灼熱の着ぐ
るみの中で俺は冷たい汗をかく。

まだ何か言おうとする折旗さんを無視して仕事モードに頭を切り

換える。

ステージ中央。非常に胃に悪い回り道の果て、マツレンジャーと再び相対した。

『抵抗するんじゃないぞ、マツレンジャー』

『くそっ、一体どうすればいいんだ……くはっ、うおっ！』

俺は一方的にマツレンジャーを殴る蹴る。手加減はしない。迫力のないヒーローショーほど見ていて情けないものはないし、そもそも陽之介の鋼の筋肉を生半可な力で叩こうものなら自分の手の方が怪我をしてしまう。

「大変！ このままじゃマツレンジャーが負けちゃう。みんな、大きな声でマツレンジャーを応援してあげて」

ここからの流れはオーソドックスだ。敗北寸前のマツレンジャーが観客の声援でパワーアップ、そのまま怪人を翻弄しつつ人質を救出。後はマツレンジャー必殺の門松アタックで怪人爆死。

応援する人数は限りなく少ないが、そこはスタッフさんの声出しに期待しよう。おっさん達の叫びから力を得るヒーロー、それこそマツレンジャーが他のヒーローと大きく違う点だろう。スゴいや、僕らのマツレンジャー（失笑）

『いいザマだな、マツレンジャー！』

俺は一度後退した。マツレンジャーに致命傷を与える攻撃、助走からのドロップキックをするためだ。

『これでトドメだ!』
リハーサルや本番を何度も繰り返して精錬された動き。特に今日の
は、折旗さんから受けたストレスの発散をするべくいつも以上に気
合いが入っていた。被害者役の陽之介には悪いが、俺の鬱憤を受け
止めてくれ。

ダッシュ、そして跳躍……
くらええええええええええ!!

「っかはっ!」

俺の足が突き刺さり、防御をしなかった相手は床をバウンドしながら
ら転がった。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙。

ステージが、舞台裏が、観客席の人達が言葉を忘れて啞然として
いる。

姉御が眉を寄せて素の顔に戻っている。

本来倒れているはずの陽之介が棒立ちしながら地面に目線向け
ている。

俺はすべてを投げ出して家に帰りたくなつた。目の前が暗くなる
のは気疲れのせいだけじゃない、デジャヴだ。この光景、昨日の如
月駅前とよく似ている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やつ、やつぱりイイ」

静かなる場にDMな少女の嬌声はよく聞こえた。

四話 そんな俺と分かり合えない彼女

「そこに努さんの拳があるからです」

ステージ終了後の控え室。

姉御に鼻血を拭いてもらいながら「どうしてあんな危ないことをしたの？」という問いへの折旗さんの回答がそれだった。非常に明瞭だった。

なにその登山家発言。本能が俺の攻撃を求めているってわけなの。

「ううん、ちょっと何言っているのか分からないなあ」

姉御が困りながらとりあえず笑みを作っている。陽之介のポイント稼ぎで買って出た治療係だが、内心は「なんだ、この×××女は。気持ち悪いいな」と罵倒しているに違いない。

「それで努。彼女はお前の知り合いなのか？」

「真っ赤な他人だよ」

「だがお前の名前を知っているじゃないか」

「俺が努っぽい身なりをしているからじゃないかな？」

「身なりってお前は着ぐるみを着ていただろう。分かるわけない」

「突っ込むところそっちな、陽之介君」

俺と陽之介の会話に治療を終えた姉御が加わる。

あまいつすよ姉御。一時期人間観察にハマったことがある俺と陽

之介は相手の外見から性格、趣味、名前、好みのタイプなどを予想することが出来る。特に俺はギャルに、陽之介は少年に高く深い洞察力を発揮したもんだ。命中率は知らんけど。

「あの……先ほどはステージを台無しにしてしまいすみませんでした」

折旗さんが俺達に頭を下げる。

「気にすることはない。マナーリになっていたステージには丁度良い刺激だった」

みんなドン引きしまくっていた流血ステージをそう片付けられる陽之介に器の大きさを感じる。が、それは観客席に子どもがいなかったから。もし、純真無垢な子どもがそこにいたら、教育上良くない行いをした折旗さんは陽之介からきついお灸を据えられたはずだ。

折旗さんが割り込んできてからのヒーローショーの進行は酷いの一言に尽きる。

人質がやられた時の音声なんか用意されていなかった。そのため何事もないかのように言葉を交わし合うヒーローと怪人、間に倒れている折旗さん。

シユールを通り越して狂気な現場であった。

「努さんには特にご迷惑をおかけして。昨日のことをお礼しに来たはずでしたのに……すみません」

「やはり知り合いか。努が女性に邪険にされることがあっても感謝されるとは珍しい」

「うっさい！俺は常に紳士だ。いつだって女の子から有り難くが

られているのさ」

「有明君、自分で言っていて悲しくならないの」
外野二人の言葉が辛辣だ。

俺は女性の味方、フェミニスト。そんな俺に会いに女の子が来てくれることの方が不思議と言うのか。まあ、こんな経験初めてだけど。それに自称紳士とは言うものの昨日の行いはちょっと紳士らしくなかったかな、と思う。

．．．
一体折旗さんは昨日のやり取りのどこに恩義を感じたのか．．．

「俺って折旗さんに何かしたっけ？　かなり人聞きの悪いことしかやっていない気がするけど。そのアイアンクローとか．．．．．」
「それですよ、最高のご褒美でした」

いい加減学習しよう。この少女に一般人の価値観は通用しないのだ。

もうやだ。

「にしてもどうしてこの場所が分かったの？　俺達って昨日会ったばかりだよな。ここでバイトをしていることなんて言うはずないし．．．．．偶然？」

「いえいえ。私、人よりも鼻が効くんですよ。それで努さんの臭いがここからしたので思わず来ちゃいました」

「へえ、そうなんだ。そうなんだ．．．．．あっはっはっは、じや！　お疲れさまでした！」

さて今日もよく働いたなあ、煩わしい世間の事なんてすべて捨てて家路につこうかなあ。

「まあまあ待ちなさいよ、有明君」
一刻も早くこの場を去りたい俺へと、姉御が距離を詰めてきた。

「変わっているけどお前にはもつたないくらいの可愛い子じゃねえか。大事にしてやれよ」

陽之介の耳に入らない小声で囁いてくる。

「あれを受け入れるだけの抱擁力はないっすよ」

「ああん、あたしが気に入った子にケチをつけるたあ良い身分になったもんだな」

「うっ、折旗さんのどこを評価出来るって言うんっすか？」

「世の中の女性は二つに分けられる。陽之介君に媚びを売るクソ女か、身の程を知って陽之介君に手を付けない賢い女にね。折旗って娘は後者だ。頭の良い子は好きだぜ、あたしは。だからしっかり捕まえておけよ、なっ」

姉御は陽之介に近づく女の子に敏感だ。折旗さんは性格はアレだが容姿は整っている。姉御的にはこのまま折旗さんの興味が俺に向かっつていて欲しいのだろう。

折旗さんはきょとんとした顔でひそひそ話す俺達を見ている。
可愛いよな、確かにすげえタイプなんだよな。話さず遠くから見ると分には。

「あ………私が何か？」

「い、いや、別に」

「なに恥ずかしがっているのよ。有明君がね、怪我をさせてしまったおわびに折旗さんを家まで送って行きたいっす」

「ええ!?」

キラークラスの斬れ味が半端ねえつすよ姉御。

「本当ですか、でもいきなり家は……………」

おや……………折旗さんが珍しく外見通りのお淑やかな反応をしている。俺の中の折旗さんなら断固送ってもらおうと思っただけ、よくよく考えれば俺は折旗さんのことを多く知らない。昨日遭遇したばかりだし。おかしな言動が目立つけれど根は純情なのかもしれ

「今日は家に親がいるんです。ハードなプレイは難しいかも……………あつ、でも野外なら」

純情なんてなかった！ そんなものは欠片一つなかった！ とんだ変態さんだ。もう僕おうちに帰りたいたいよママン。

「では努と折旗さんの話がまとまったところで」

「全然まとまってねえよ！ すべて破棄したいこと山の如しだよ！」

「そうか？ とりあえず話は着替え終わってからにしないか。俺も努も汗だくだろ、このままじゃ風邪を引いてしまっ」

陽之介の言うとおり俺は怪人の着ぐるみから頭だけ出した状態であり、陽之介は未だ赤タイツだ。

「そうだな、うんうんそれが良い。じゃあ折旗さん、話は後にしましよ」

「分かりました。私、ヒーローショー広場の前で待っていますから」「おーけーおーけー」

ふふふ、誰が行くかよ。普段着に戻ったらこっさり裏口から出て、ほほいランドを脱出してやる。

俺と陽之介は控え室を出ようとドアに寄った。すると、俺達の手が触れる前にドアが動いた。

「ここが出演者の控え室かね」

見かけないおっさんさんが、ドアの向こうから現れた。やたら威厳がある、ように見せようと顔と声に力を入れて。

誰だ、この人？

五話 そんな俺とヒートアップ市長

「ここが出演者の控え室かね」

見かけないおっさんさんが入ってきた。大松市のシンボルマークである松が描かれたネクタイをカッターシャツに巻いている。そのカッターシャツが老年太りの身体から溢れる汗で透け、おっさんの下着を露わに。なんて視覚兵器だ。

「ふむふむ、格好からして君達二人がヒーローと怪人を演じていたようじゃの。高校生かい？」

「そうですね、どちらさまでしょうか？」
陽之介が毅然と答える。

「これは失敬。先に挨拶をしておくべきだったな。ワシはこの大松市を束ねる市長だ」

「市長!？」

俺達は同時に驚く。なんだってそんなお偉いさんが。

「そして彼女が……………」

市長と名乗るおっさんの後ろ、ドアの前に女性が立っていた。

「秘書の片桐麗奈君だ」

「片桐です。よろしくお願ひします」

麗奈さんね……………すぐさま脳の深部にその名を登録する。

薄いメタルフレームの眼鏡、すらりとした身体を包むシワのないスーツ、よく手入れされた黒の長髪。キャリアウーマンという言葉

を完璧に体现した女性である。俺達の年代では発せられない色香に昏倒してしまいそうだ。

麗奈さんは俺達四人にさつと市長の名刺を手渡した。電話番号にメールアドレス、市のマークまで記された精巧な作りだ。偽物には見えない。

「市長さんがどうしてここに？」
姉御が不審そうに目を細める。

「そちらの少年二人に頼みがあるのじゃ。重要なことだ。君達、名前は？」

「有明努つすけど」

「高津陽之介です」

「有明君に高津君だね。すまないが、二人を残してお嬢さん達は席を外してくれないかね。あまり広めたくはない話でね」

「ええ、私達はのけ者なの。何だか面白そうなのに」
不満気な姉御だが

「市長直々の話です。機密性が高いものなのでしよう。柴国、いえ亜里沙さん。ここは聞き分けてください」

「あつ、名前で……うん！ じゃあ折旗さん、私達は行きましょ」

と陽之介から初めて下の名前で呼ばれたことに目をときめかせながら、「あの、あまり強く押さないでえ」と困り顔の折旗さんを連れ出て行った。

何というか、ちよろいな姉御。

控え室に四人。

ステージ衣装から普段着に着替えた俺と陽之介は、テーブルに挟んで来訪者二人と向かい合う。あらかじめスタッフの人にはここには近づかないようにと、市長は話を通したそうで、この場を乱す人は登場しない。

「先ほどのヒーローショー見せてもらったよ。少ない予算と人材でまあまあ頑張っていたね」

ああ、そういえば……このオアシスが所々に見える砂漠化した頭、記憶にある。あの時、観客席から見ていたのか。

「特にヒーローと怪人の格闘戦は年甲斐もなく手に汗かいてしまったよ。最後のシーンは、まあ……いろいろなコメントし辛いものがあつたがね」

言葉を濁す市長。無理もない。人質が怪人の攻撃を自ら受けて、悶えながら倒れるあの状況をうまく表現なんて出来るわけがない。誰にとつても忘却の彼方にポイツしたいものだろう。

「君達の演技は良かった。その力を貸してもらえないだろうか？」
市長が身体をやや前にした。本題に入るぞ、と口だけでなく姿勢からも知らせてくる。

「昨日、如月市で起こったシンキロー事件は知っているかね？」

「はい、新聞で」

「まあ、現場で」

「よろしい。では如月市でヒーローが誕生したことも把握している

ね。このヒーロー、魔法少女タイプであり……」
市長が生唾を飲み込んだ。

「目撃者曰く絶世の美人でボン・キュ・ボンの奇跡のプロポーシヨンをしているらしい」

「な、なんだって！」

俺は我知らず立ち上がっていた。ヒーローが生まれたことは聞いていたが、まさかそんな極上ものだったなんて……

「やばいじゃないですか！」

「そうだ、やばいのだ」

「たまらんじゃないですか！」

「そうだ、ワシもこの年なのにあたまるんだ」

「反則じゃないですか！」

「そうだ、まったくもって反則だ。是非見てみたい」

「市長、それに有明さん。あんまり騒ぐと静かにしてもらいますよ」
氷柱のように冷たく鋭い麗奈さんの一言に俺と市長は押し黙った。
姉御並の恐怖を感じてしまった。この秘書さん、ただ者じゃない。

「ごほん、ええ、一度シンキローが発生した市は継続的に狙われる傾向にある。如月市もまた長き戦いを始めることになる。そうなればヒーローの活躍は続き、大きな人気を得ていくだろう。間違いなく多くの男達のハートを鷲掴みする。その人気を使って如月市はさらに発展することは想像に容易い。だが、我々大松市の人間にとつては喜ばしいことではない」

「どついついこと？」

「なるほど」

陽之介だけ理解した顔をしていて俺の自尊心が中破。

「このまま行けば、少なくともものほほいランドはおしまいでしょ
ね」

「ほお、分かるかね」

市長はヒーロー出現による金や人の流出について簡単に話してくれ
た。簡単というのは市長の口から出た前置きで、俺にとっては十分
難解だったため途中から聞くのは止めた。それより新たに登場した
魔法少女ヒーローの容貌を妄想するのが先決だ。

「分かったかね、有明君」

「はい、やはり魔法少女に黒パンストは必須だと思います」

「なかなか良いセンスをしているな君は」

「市長、有明さん。沈黙したいのですか？」

「分かったかね、有明君」

「すみません。聞いてませんでした、でも今日も俺は頑張って生き
ています」

「ならばよし！」

ふう、何とか誤魔化せたな。

「はあ………仕方ありません、私が有明さんにも分かるよう
に説明しましょう」

麗奈さんが額を抑えながら話し出す。

「隣合ったレストランがあったとします。片方は大きく、片方は小
さいところですよ。さて、有明さんならどちらに行きたいですか？」

「えっと、大きさだけでは評価しにくいんですけど、大きい方が入り
やすい雰囲気ですよね」

「では、大きな店に美人のシェフが務めることになりました。彼女
は見た目もそうですが、料理の腕も一流です」

「大きな店一択です。それはどこの店ですか！」

「例え話です。ここで大きな店を如月市、小さな店を大松市に置き換えましょう。そして料理を遊園地、美人の料理人を魔法少女ヒーローにします。有明さんのように、多くのお客さんは魔法少女の魅力に釣られて如月市の遊園地に殺到するでしょう。魔法少女のグッズやヒーローショーで遊園地の人気は高まりますね、そうなれば小さな店、大松市の遊園地のほほいランドはどうなるでしょう」

「ああ、そういうことかあ！」

やっと分かった。俺はもやもやが消えた晴れやかな気分だ

「陽之介、新しいバイトを探そうぜ。個人的に今すぐくウエイターをやってみたい」と見切りを付ける

沈む船にすがりつくほど俺はのほほいランドに思い入れはないしな。

「……俺は嫌だ。子ども達のヒーローを止めるなんて」

「子どもって、あんまり来てくれないじゃないか。歓声が欲しいなら如月市の遊園地でバイトしろよ」

「あそこは高校生のバイト禁止なんだ。それに魔法少女のヒーローショーでは俺の出番はない」

ああ、確かに。魔法少女にぶちのめされる悪役にしかねないだろう。子ども達から敵扱いされるのを陽之介が耐えられるはずがない。

「何としてもものほほいランドは守らなければならん。のほほいランドが潰れれば大松市は再起不可能な借金を抱えることになる」

「んなこと言われても向こうの遊園地は本物のヒーローを題材にしているのに、こっちはしがないマツレンジャーと怪人のタイムマシンでしょ。勝ち目ないっすよ」

「本物！ 有明君、今本物と言ったな！」

市長が頭から湯気が出そうなほどヒートアップする。唾が飛んで汚い。

「我々のマツレンジャーも本物にするのだ！ そうだ、本物になれば如月市に遅れを取ることはない」

「本物って……マツレンジャーにシンキローを倒させる気っすか？」

俺は冗談のつもりで言った。

「オフコース！」

市長はなぜか親指を立てて英語で答える。

えっマジで？ そつと対面する麗奈さんの方を見た、彼女は俺の視線に気づき小さく肯いた。

「……」言葉が見つからない。呆れを通り越してしまった。

だって、シンキローだけ。

人間の手に負える相手じゃない。たとえ格闘技世界チャンピオンを連れてきたとしても、昨日のシブヤにさえ勝てないだろう。

単純な強弱の問題じゃないんだ。単純な暴力で倒せる相手ならヒーローじゃなくても軍隊で何とかなつたと思う。でも現実では、シンキローに対抗出来るのはヒーローだけ。

なぜならシンキローは特殊能力を持っているのだ……

人間が逆立ちしたって太刀打ち出来ない特殊能力を。

六話 そんな俺と危険な依頼

「シンキローを倒す、ですか……それには大きな問題が二つあると考えます」
陽之介が申し立てる。

「聞こうじゃないか」

「まず、シンキローです。奴らは人口密度の高い場所に出現する特徴を持っております。如月市と大松市、市の面積は同等であります。が人口には大きな差があります。果たして都合良く大松市にシンキローが現れるでしょうか？」

「そうだよなあ。うちみたいな田舎にシンキロー様がいらっしやるとはねえ。アイツらの中に変わり者がいるんなら話は別だけど」

「もう一つ。シンキローの再生能力です、シンキローは宇宙を旅して来ただけあってとんでもなくタフ、拳銃で作られた傷など瞬く間に塞いでしまおうと言っじゃないですか」

シンキローを相手するのはヒーロー、この構図が出来上がったのにはシンキローの身体能力が強く関係している。陽之介の言うとおり、並の攻撃でシンキローを倒すのは難しい。それこそ一撃で木っ端微塵にするほどの、そう戦車の砲弾レベルの爆発力がある何かで仕掛けなければならぬ。

しかし、現実問題シンキローが町中に現れる度に戦車を持ち出すなんて無理だ。建物や人に当たる可能性がある中でおいそれと撃つことも出来ないし、日本のいたる所で毎日のように出るシンキローをいちいち相手にしていたら莫大なコストがかかってしまうのだ。

よって地域防衛の白羽の矢はヒーローの所に立つ。ヒーローの攻撃は多種多様、拳から中世の武器、魔法のような謎ビームまで色々だ。そして手段がどんなものでもヒーローの攻めはシンキローに確かなダメージを与える。再生させないのだ。どうやってそんなことを可能としているのか、未だにテレビの特番で偉そうなおっさん達がうだうだ結論付かずの無駄話をしている。

「市長は狙ってヒーローを誕生させることが出来るのですか？ それならば二番目の問題は解決しますが」

現在の日本には二〇〇人くらいのヒーローがいたと思う。どいつもこいつも曲者揃いだ、共通点がある。

ヒーローはシンキローに襲われた町に誕生するってこと。

これについても理由はチンプンカンプン。けど一つ言えるのはシンキローに襲われる価値のない大松市には、ヒーローが誕生する価値もないということだ。

「高津君の言はよく分かる。ワシらの大松市にはヒーローもシンキローもおおいでならない。まったく悲しいな」

市の代表者がヒーローはまだしもシンキローを歓迎したがっているところに大松市の落ちぶれっぷりがありありと見える。大丈夫なのか、俺の町。

「しかあし！ ヒーローもシンキローもこの際関係ない！ ワシらの計画にそんなものは必要ない！」
陽之介の厳しい指摘でどんどん老け込んでいた市長が、急に拳を振り上げる。

「えっ？ 関係ない？」

「お二人ともこちらのシンキローをご存じでしょうか？」

いつの間にかノートパソコンを取り出していた麗奈さんが、画面をこちらに向ける。ディスプレイに映っているのは巨大な蝉の殻のようなシンキローだ。

「名前はチワワと言います」

「チワワあ？」

チワワってあの愛くるしい顔で「お金を借りようよ」とせがむ悪どい犬だよな。全然似てない。

「初出現ポイントはメキシコのチワワという州都だったそうです。ともかく重要なことは名前ではありません。このシンキローの特性です」

画面が切り替わる。同じチワワの画像だが、背中がぱっくり開いている。

「脱皮ですか？」陽之介が鋭く質問する。

「ええ、チワワはある程度人間から栄養を吸収すると形態変化を起こします。それまでは地面を移動していましたが、変形後は羽で空を飛ぶようになります」
ますます蝉だな。

「本体よりも注目すべきはこの抜け殻です」

「そういうことか……市長、あなたは八百長をする気ですね！」

「ほう、気づいたか。高津君、優秀だな君は。有明君もワシのすることに検討が付いたかね？」

「ふっ、当然じゃないですか」

俺は前髪をサツとかき上げてキザっぽく言ってやった。

「市長はこの抜け殻をマスコットキャラにして、八百屋を開くわけです」

「努、八百屋じゃなくて八百長だ。内々に示し合わせて行う戦いのことだ」

「ふっ、当然知っているさ。今のちよつとしたジョークさ」

俺はもう一度髪の毛を払って余裕の笑みを作った。

「……………」

おやおや、俺のキレのあるジョークが三人に通用していないようだ。やだねえ、センスのない人達は。

「有明さん、分からないなら素直に言ってくださいね」

麗奈さんが極寒の目でこちらを見ている。やべえ、もしかしてまったく話に付いていけないことがバレバレっすか。しまったな、抜け殻をマスコットキャラにするのはナイスな発想だと思ったんだけどなあ。

「あゝおほん。市長から八百屋に転職したがるほどワシは冒険家ではないぞ。まあ、出来の悪い生徒にも理解できるように話してやるう……よおくきくんじゃぞお、まずチワワのぬけがらをお」

「なんで急に幼稚園児向けのゆっくり喋りにしているんっすか！」

「有明君に合わせたつもりなんじゃが」

「し、失礼な！でも、そっちの方が眠くならないみたいなのでお

願います」

「たまにお前の生き方に憧れることがあるよ、努」

周りから集まる生暖かい視線の中、俺は市長の立案した『のほほいランド&大松市復興化計画』について説明を受けた。

ふむふむ……ほうほう……あつ、すみません。そこは赤ちゃんに話すレベルでもう一度。

「以上だ、二人とも協力してくれるかな？」

「了解しましたっ。この有明努にお任せあれ」

市長からの依頼はきな臭く、警察沙汰になる危険性を持っていた。でも、それに合った報酬が市長のポケットマネーから支払われる。貧乏高校生としては、見逃せない額である。俺は迷わずこの話に飛びついた。

「お、俺は……」

だが、相方はまだ悩みの中。この計画は世間を欺くもの、根っからの善人である陽之介には抵抗があるようだ。机とにらめっこしながら受けるか拒否するか迷っている。

「考える必要はないじゃん。計画が成功すればマツレンジャーの人氣はうなぎ登り、きっとヒーローショーに来る子どもは増えるぞ」

「その子どもを騙すやり方がどうしても承服出来ない。俺は子ども

達の声援に見合う男でありたいんだ」

「陽之介……」

「まったく本当に頭の固い奴だな、こいつは。」

「高津君、君の苦悩はもつともだ。しかしね、このままではマツレ
ンジャー自体がおしまいなのだ。のほほいランドの宣伝の一環と考
えてはくれんかね」

「陽之介、ダメなのは子ども達が騙されたと気づいてしまうことじ
やないのか。最後まで貫いた嘘は本当と変わらないんだぜ。お前な
らやれるさ」

俺と市長は交互に説得の言葉をかけ続け……

「分かった、分かったよ」

陽之介が立ち上がった。

「やると決めた、決めたんだ。だったら本気で全力で貫徹する」
その瞳には強い輝きが灯されていた。

七話 そんな俺と俺専用MS

市長達との話し合いは思いのほか長引き

「詳細はこれから煮詰めていく。二人ともそれまで体調管理はしっかりするんじゃないぞ。うん、今日はここまで。お疲れさん」

という解散の合図が鳴った時には窓の外は夕日で満ちていた。

市長と麗奈さんに別れを告げ、ヒーローショーの建物から出たところで

「やっと出てきた、もう遅いよ」

頬を膨らませた姉御が駆けてきた。一見、機嫌が悪そうに装っているが、装っている時点でまだまだ余裕のようだ。陽之介が絡むと姉御は大和撫子にだってなれる。

77

「待たせてしまい、すみません」

「あついいのいいの、そんなに謝らないで。私が好きでやっていることだから。それじゃ帰ろうよ」

姉御が陽之介の腕を引っ張って歩き出す。今日も今日とて俺はいらない子扱いである。ぐすん。

バイトの帰り道は毎回こんな感じ。

肩を並べたがる姉御と、その積極さに戸惑いながら進む陽之介。姉御曰くラブラブな二人の間に入るのももちろんNG、近づいただけで後日姉御に呼び出し食らってリンチの刑なのだ。そのことを重々知り尽くしている俺は、数メートル後方をのんびりと拾い歩き……と言うのがいつものパターンだったのだが。

「それじゃ私達も行きましょう」

今日は俺にもパートナーがいる。さつきからすぐ隣に陣取っている折旗さんだ。そう言えば帰る約束を強制的に結ばれていたんだっけ。……市長の登場ですっかり記憶の片隅に追いやっていた、俺つてば不覚！

「折旗さんはどうやって来たの？」

「自転車ですよ」

「そっか俺と一緒にだね。じゃあまず駐輪場に行かないと……っどめん」

俺はジープンのポケットを弄りながら

「自転車の鍵を控え室に忘れちゃったみたいだ。ちよつと取ってくるから先に行つて」

と焦りながら言ってみる。

実際、自転車の鍵はポケットの中にある。これは演技だ。折旗さんから逃げるための一芝居だ。

「ふふふ、ここで待っていますよ。私、放置されるのは得意ですから」

「うっ、いやあすぐ追いつくから。気にせず、どぞどぞ」
満面の笑みで返されると、さすがに心が痛む。が、このまま折旗さんと帰宅すれば、それ以上の心労に襲われるのは確定的だった。

「努さんの三歩後ろを従者となって付き添う私が、どうして努さんの前を行けると言うのでしょうか」

忠犬八千公のように「ご主人様をお待ちしますワン」状態になっている折旗さんは頑として動こうとしない。仕方ない、ここは多少強引にでも。

「ご主人様の言う事を聞かない悪い子は、往復ビンタおあずけの刑だぞっ」

日本語として色々間違っている言い方だけど

「そんな殺生です。ビンタ……ああ、なんて甘美な響き。じゆるり。分かりました、先に駐輪場へ向かいます。頬を入念に張ってお待ちしていますから」

折旗さんにはこれ以上ないくらいの決定打になった。だらしなく垂らした口元からハアハアと怪しげな吐息を出しながら走り去っていく。

折旗さんの後姿を眺めながら俺は改めて彼女との付き合い方を考え直そうと思った。

さて、折旗さんが向かったのはきつとのほほいランド正面ゲート横の駐輪場だろう。

だが、俺の自転車はのほほいランド関係者用の駐輪場に置いてある。そこからなら裏ゲートを通つてのほほいランド敷地から抜け出せる。来客用駐輪場に自転車を停めただろう折旗さんの目に留まることなくバイバイ出来るって寸法だ。

女の子と二人で帰宅なんて夢のシチュエーションだけど、折旗さんとやったら夢は夢でも悪夢決定だ。ここは心を鬼にして逃げましょ。

そんな俺のささやかな目論見は

「HEY、努さん。心の準備はOK?」

テンションが上がりすぎてラッパー調の人格を変わってしまった折旗さんの前に粉々になった。

なぜだ。なぜ関係者用の駐輪場いる。

「OH、自転車? それなら私の自転車もはなっからここに停めましたYO」

「しかもお隣同士!？」

「YES! 自転車には努さんの臭いが染み着いていましたからYO、一発必中でクンカクンカ……ハアハア」

ジーザス、この子は人間じゃねえ。

「さささ、プリーズ。その愛をわたくしめの頬にブレイク」
頬を差し出してくる折旗さん。

「う、うつつ……」

俺は仰け反りながらゆっくりと自分の手を前に出す。そして、ペチペチと可愛らしい音のなるピンタを折旗さんに浴びせた。

それが常日頃女性に優しくあろうとする俺の最大限の譲歩だった。

が、折旗さんは言った。

陽気なラテン系の顔から、一気に無表情になって。

「なぜベストを尽くさないのか」

いや、ほんと勘弁してください。

のほほいランドは自然溢れる大松市の中でも緑の占める割合が高い田舎に位置している。店も民家も少なく、土地代が安いしか取り柄のない場所だ。

夕暮れ時。そんな町外れに人の気配はない。必然のように折旗さんとの二人だけの世界が形成されてしまった。

「私の家は大松市と如月市のちょうど真ん中にあるんですよ」
家まで送る、という約束でようやく機嫌を直してくれた折旗さんが風を切る。

「結構遠いなあ」

「その分、いっぱいお話出来ますね」

俺はラブコメの主人公じゃない。こんな台詞の中に包み隠さず含まれている好意を受信出来ないほど鈍感ではられない。

ずっと感じていたが……折旗さんは、俺に惚れているのではないだろうか！

「努さんにお願ひがあります」

折旗さんは前を向いたまま話し出す。夜の気配で熱から冷めた風が彼女の長い髪をサラサラ撫でていく。

「私のことは希糸と呼んでくれませんか？ 亜里沙ちゃんが言っていました。下の名前で呼び合った方が良く人間親しみを湧きやすいものですと……私は努さんと呼んでいます、ぜひこちらのごとも名前で、希糸でお願いします」

希糸ね……ザイル並に図太い神経にはとことん合わない名前だよね。

「わ、分かったよ」

ここで「分かったよ、折旗さん」と皮肉と拒絶を持って返せるほど俺は非情になれない……。というか女性の扱いに長けていない。まあ、この子の場合には冷たくしたらしたで喜びそうだから肯定するしかないよね。

赤信号。車なんて視界の先まで見渡しても走っていない交差点だが、俺達は律儀に自転車を止めた。意を決するには丁度いいキツカケだ。

「き、希糸さん」

注文通りに呼び方を変える。思った以上に恥ずかしいもんだ。

「きゃっは！ なんですか！」

うわぁ瞳の中が銀河だよ、めちゃくちゃ輝いているよ。どんだけ脳内フィーバーしているんだろ。

「俺の思い過こしと言っか……自惚れと言っか……」

「??？」

「どうも口に出しにくい事なんだけど……。ああ、もうこんな頭を悩ませるのは俺のキャラじゃねえや。うっっ！ズバリ聞きますー！」

「は、はいっ」

「アナタ、ミーを、スキ？」

ズバれなかった。最後の最後に片言に逃げてしまった。マイネーム
イズ ヘタレ。

「……ふふっ」

傾いた太陽が希糸さんの顔に影を作る。それが変態チックな彼女に
『真面目』という持ち合わせていないはずの成分を追加した。

「好きですよ、大好きです」

「えっ……」

「頑張つてアピールしていたんですけど、伝わり辛かったですか？」

「……」

「あれっ努さん？ つ・と・む・さ・ん。急にポーとしないでくだ
さい、一世一代の告白だったんですよ」

「……」

「完全に固まっちゃっていますね。仕方ないです、ちょっと痛い
ですけど我慢してください」

バシッとチョップが炸裂した。

「はっ！」

「気付きました？」

「あ、ああ……」

希糸さんから放たれた人生初の告白によって、『これは現実か、そ
れとも妄想力が臨界点を突破して白昼夢を見せたのか』という議題
を巡った大激論が脳内で開催されていた。いかんいかん。

「いかんついでに希糸さん、ちょっと聞きたいんだけど」

「何ですか？」

「なぜに俺の手があなたの頭をぶつたのでしょうか？ 普通逆じゃね？」
今のチョップ。希糸さんが俺の手を持って、自分の頭を叩くというわけの分からんものであった。

「好きな人に暴力なんて加えられませんよ」
夕日と恥じらいで赤くなった希糸さんが聖女の神々しさで言う。

「うっ、また好きって……いやいや、だからって自分を傷つける必要ないだろ」

「そんな！ 努さんは私のライフワークを否定するんですかっ」

「あんた俺の拳に人生を懸けてんの!？」

「有り金全部と臓器をつぎ込んでいるくらいの気持ちですっ」

「おふっ！」

せっかく告白されて甘い気分に入っていたのに、やっぱり希糸さんはダメだ。矯正すべき点が多すぎて、医者が匙を投げる手遅れっぷりだ。

「努さん、青です。行きましょう」

話に夢中で信号を蚊帳の外に置いていた。希糸さんの言う通りとっくに進めの標識になっていた。

「あ、ああ」

先にスタートして先行する希糸さんを虚ろに見る。風が名花から漂うような希糸さんの臭いを掬って、俺の鼻孔に入れてくる。はあ、姿形だけじゃなくて他の要素も絶品なんだよなあ、あんな子に好意を寄せられちゃって……小躍りを披露したくなくても不思議じゃないのに。Mさえなかったら。

「今日はありがとうございました」

大松市の外れ、住宅街の一角に自転車を止める。最寄り玄関口には『折旗』と書かれた表札が掲げられていた。

「本当に家に上がらなくていいんですか？」

「それだけは見逃してください」

どこにでもある日本建築二階建て、だが俺の第六感が第一級警戒態勢を取れと警告してくる。あれは悪魔の巣だ、入ったら性病を変えられるぞ、と。

「じゃ、じゃあ俺はここで」

「ま、待ってください。一つだけ言わせてください」
去ろうとした背中を切実な声が撫でる。

「誤解してほしくないんですけど、私は軽い女じゃありませんから。確かに努さんと会ったのは昨日ですけどこの気持ちはその場の勢いや雰囲気の流れで生まれたものではありません。私は、私は――」

「希糸さん……」

俺は今日初めて希糸さんを見つめた。無視したり聞き流してはいけない深刻な言葉だと感じた。おっとりとした面影は消え失せ、代わりに強い意志を滲ませている。

思えば希糸さんはすぐにDM発言で会話の流れをぶち壊し、自分の真意を覆い隠していたような気がする。本当の彼女が今、何かを伝えようとしているのだ。きつとさっきの告白より重大なものなんだ。俺は自然と腹に力を入れて、潤いのある唇から発せられる希糸さんの想いを待つ。

「私は………努専用MSです」

「なにそのシ ア専用MSみたいなノリ!？」

「努さんの仕打ちにだけに快感を得るMS（マゾ少女）の略です」

「知りたくねえよそんな意味！ シリアスな空気が台無しじゃねえか！」

「私、別に痛めつけられるのが嬉しいとか今まで思ったことありませんでした。でも、昨日の努さんからプレゼントされた一撃はそんな固定概念を壊してくれたのです。感動です。あつ、今でも他の人から危害を与えられるのはただ怖いだけ、私は努専用MSなんですから。これからも末永いお付き合いをお願いしますね」

「いやだあ、俺は暇さえあればチュツチュし合うような甘いお付き合いが良いんだあ！」

「えつ、チュツチュって接吻のことですか。努さんってアブノーマルなんですな」

「どつちがだよっ！ 明らかにそっちの方が常軌を逸しているだろ。常識を、常識を学んでくれよ！ うわあああん!!」

俺は自転車に飛び乗って希糸さんから離れたい一心でペダルを漕ぎだした。

「きつと私達は相性が良い………いえ、最悪なんでしょう。だからこそ私は努さんが好きになれました」

そんなギリギリの俺だから、黒くなった空に吸い込まれる希糸さんから出た別れの言葉についてきちんと考えることはなかった。

八話 そんな俺と夜を跳ぶ魔法少女

折旗家を後にして、ガムシヤラに進むことだけを考えていた俺はうつかり如月市の方面に向かっていた。この辺りの道には明るくないので仕方ない。一応振り返って、希糸さんが追いかけていないか確認……よし、大丈夫だ。

「さあてどうつすかなあ」

せつかく如月市に来たのなら寄り道して帰るのも良いな。そうだが、今日は夜のお供であるグラビア紙の発売日じゃなかったか。今月号は夏真つ盛りと言うことで水着特集が組まれていたはず。ビーチで戯れる露出度の高いお姉ちゃん達が俺を待っている。

決まりだ。如月市一大きい本屋を目指そう。あそこなら絶対取りそろえている。

俺が進路を選択した直後である。

『市民の皆様、こちらは如月市役所防衛係です。現在、如月駅周辺でシンキローが出現しました。市民の皆様は駅に近寄らず、自宅やお店など屋内に避難してください』
スピーカーを取り付けた車が目の前を通過した。

昨日の今日でまたかよ。

よほど如月市はシンキロー達に気に入られたようだ。ここから駅までそう遠くはないだろう。大松市の方へ逃げた方がいいかもしれない。昨日のシブヤは大したことないシンキローだったが、今回現

れたのもまた安全な奴とは限らないからな。

俺は自転車をUターンさせようとして……タツタツと鳴る靴音を聞いた。

「なっ！」

驚いた。聞こえてくる音は特別おかしなものではなかったが、聞こえてくる方向がおかしかった。それは俺の頭上から響いてきた。

顔を振り上げ、仰天。何かが俺の遙か頭上を跳び越えたのだ。そんな馬鹿な！

人間離れたした脚力で民家の屋根を移る影、まさかシンキローかと警戒したもののそうじゃなかった。

満月の光が真実を見せてくれた。影は……女性！
しかもフリルの衣装を着た少女。

途端に市長の言っていたことがフラツシュバックした。

「如月市のヒーロー、絶世の美人でボン・キュ・ボンの奇跡のプロポーシヨン……あれが」

目撃者の証言なんて大げさに吹いているのかもしれない、と少し心配していたが余計だった。一本一本に華麗さが注入された長髪を束ね、凜とした顔つきで月夜を跳ぶ。その幻想さにはありとあらゆるものを虜にしてしまう抜群の魅力が秘められていた。

少女は駅に向かって屋根伝いに走っていく。すぐに俺の視界の外に出てしまった。けれど、俺の網膜には彼女が克明に焼き付けられた。

やばい。どんな美人に会っても興奮する俺なのに……今高鳴っているこの胸は熱狂とは反対の緊張によるものだ。それだけ魔法少女は規格外だった。

気付いたら俺は必死に自転車をこいでいた。家のある大松市ではなく、反対側の如月市駅に向けて。

野次馬根性に近い好奇心か、これから人気を争うことになるライバルへの対抗心か、それとも。

とにかく俺は懸命だった。

大通りを避け、『これより先は立ち入り禁止』の立て札を置いている警察や市役所の人たちの脇をすり抜け、最後には自転車では通れない路地裏を両肩擦りながら突っ走った。

そうして辿り着いた駅前。昨日来た時には人だけだったのに、今は二人しかいない。いや、正確には一人と一つの生物。

今回のシンキローはエビのような形をしていた。夜でも駅前には街灯がわんさかある。その光たちがシンキローの赤い容姿を不気味にライトアップする。シンキローの手である、立派なハサミが煌く。

睨み合っていた両者だが、しびれを切らして先に仕掛けたのはシンキローだった。ザッツと数十本ある足を細かく動かし、魔法少女に近付く。と、同時に人間を真つ二つに出来そうなハサミが大きく開く。

だのに魔法少女は動かない。バックステップで距離を置こうと思えば出来そうなものなのに、あえてなのかその場に留まる。

あぶないっ！

なんなくシンキローのハサミが魔法少女の身体を射程に収めた。
後は閉じるだけで……

「っく」

俺は思わず顔を背けてしまった。魔法少女の無残な最期を見たくなかった。

が、何かおかしい。

待てども肉が切られるおぞましい音がしてこない。耳に入ったのは『カン！』というハサミが同士がぶつかるものだけ。

目を細めながら視線を戻す。闘いの場に立っていたのは、シンキローだけだった。

魔法少女は？

地に倒れてはいない。広い駅前を右へ左へ見渡しても動くものは……あつ。

闘いを遠くから見ていたので何とか気付けた。異変は横ではなく、上から。

魔法少女は跳んでいた。直上に遙か高く。

その背中を「っ」という文字ほど反らせ、弧を描くような体勢になっていた。

振りかぶっているのだ。両手に棒状のものをしっかりと握っている。よく見えないが、あれが魔法少女の武器なのか。

シンキローの反応は遅れている。避けられたことに疑問を持ち、

不思議そうに自分のハサミを眺めたことが致命的だった。

「たあああああ！」

勇ましい雄たけびと共に魔法少女が大地に帰還した。着地の前に武器を振り下ろすという動作を加えて。

駅前に馬鹿でかい音が響く。大きな音と言うのは大抵高いものだけど、俺が聞いたのは骨身に染みるような低く鈍いものだった。

完全粉碎。

魔法少女の武器はシンキローの脳天をぶち壊した。シンキローは悲鳴一つあげられなかった。

シンキロー。

そう呼ばれる理由は奴らの登場と退場方法による。奴らはどんな人の多い町中でも、ふわっといきなり現れる。まるでワープでもしてきたかのよう。

そうしてある程度人間を襲い思うままに暴れた後、奴らは二つのパターンに分かれていなくなる。一つは登場して三〇分ほど経つ場合。どうやらこの時間がシンキローの活動限界時間のようだ。タイムリミットが来ると、シンキローはその存在が幻であったかのように忽然といなくなる。

そう、蜃気楼のように。

そして、もう一つの退場方法が今、俺の目の前で行われている。

ヒーローに破れ、活動できなくなったシンキローもまた蜃気楼になる。

地に伏せてピクピクと震えていたエビが透けていく。大きなガタ

イが何一つ残らず、綺麗に消えてなくなる。

後に残ったのは勝者のみ。

俺の方からは魔法少女の背中しか見えない。勝利の余韻に浸るその表情は分らない。

シンキローの消滅を確認した魔法少女は一度だけ肩を上下させた。終わった、と安心したのだろう。考えてみれば、ヒーローとはいえ、彼女にとってまだ二度目の闘いなのだ。張り詰めていたものも大きかったに違いない。

僅かの間、リラックスした魔法少女は俺の方に顔を向けることなく、跳んだ。いきなり横の雑居ビルの屋上まで。でたらめなジャンプだ。

そのまま俊敏な小ジャンプを繰り返して、魔法少女は戦場を離れていった。

俺は彼女がいなくなった方角をしばらく見つめながら

「ははっ」

と乾いた笑いをこぼした。

「あんな奴にマツレンジャーは勝てるのかよ」
まったく笑うしかなかった。

九話 そんな俺と出張ヒーローショー

光陰矢の如し。

古くから言いならわされただけのことはあり、まさに俺をせき立てて太陽は周り計画実行の日は刻一刻と迫る。その間、昼は客のいないヒーローショーのバイト、夜は市長の計らいによって貸し切った地区体育館での秘密の訓練。俺の貴重な夏休みは女の子と触れ合う暇なく、米のとき汁のように大きな意味を持つこともなく流れていった。

が、それもすべてこの日のため。充電期間だと思って堪え忍んできた月日は、この日を境に花開くのだ。

「以上が計画の順序です。お二人ともよろしいですか？」

「了解しました」

「OKつすよ、何度も何度も聞かされてきたことじゃないっすか。

大船に乗った気でいてくださいっ」

「その船がタイタニックでないことを祈ります。予定時間まで後八分。それぞれ身体をよくほぐしておいてください」

運転席から送られる麗奈さんの指示に従って、手足を伸ばそうとするが狭い車内ではかなり無理のある態勢だ。大型車であるバンの中であつてもこの衣装じゃあなあ。

「有明君、高津君、撮影スタッフの最終打ち合わせが済んだようだ。もうすぐ君達の出番じゃぞ。気張ってくれい」

車外の様子を調べに行っていた市長が戻ってきた。路地裏に面した

人通り皆無なこの場所では誰かに目撃される恐れはないけど、その分偵察がないと外の状況が何も分からない。

車の前方に取り付けてある小型テレビがニュースを映す。キャスターの左上に一二時一三分と時間が表示されている。

いよいよだ。ニュースが終わった直後が勝負時だ。

日本全国津々浦々の地域の特徴や名物を紹介する『ご当地ナンバーワン』が放送されるまであと数分。『笑えばいいと思うよ』と並んで日本のお昼の顔となっているこの番組が、今日は何をトチ狂ったのか大松市で行われる。今では弱りきった俺達の市だが、昔は石炭がよく発掘されるということとでそれなりに栄えたらしい。その栄光を忘れないように作られた石炭資料館、今日の放送の主役だ。

俺達はこの番組を利用する。生放送だからやっちゃまえば誰にも止められない。やるぞ、マツレンジャーを全国に名の知れたご当地ヒーローへと祭り上げてる。大胆かつバレないようになっ！

『みなさん、こんにちは。それぞれのご当地にそれぞれのナンバーワンがある、ご当地ナンバーワンの時間です』

ニュースが終わり、アナウンサーの男性とゲストの女性タレントが登場する。彼らの後ろにはガキの頃から見知った石炭資料館が佇んでいる。

「人目はないな……有明君、今のうちに出てくれ」

市長がバンのドアを開けて、周囲を警戒する。

「うっっ、じゃあおっばじめます。陽之介、先に行って場を温めておくぜ」

「しっかり頼む、くれぐれも一般人に怪我をさせるなよ」
マツレンジャー姿の陽之介がエールと忠告をかける。

「当たり前だろ、俺は紳士なんだぞ……よっつと」
巨大な着ぐるみを屈めて外に出る。やっと身体を伸ばせると解放感に酔いしれたところだが、早く行かなければならない。

俺はバンの三人に足を上げてさよならすると、四つん這いになって移動を開始した。今の俺は人間じゃない……シンキロー『チワワ』だ。

セミのパチモンみたいなチワワの抜け殻、それがどういう経緯で大松市にやって来たのかは知らない。シンキローの身体はその生死に関わらず消えてしまうのが常識だが、消える前に本態から離れた部位はそのまま地上に残る。例えばヒーローとの戦闘時に切られた触手などがだ。シンキローの身体の一部は基本的に国が回収して研究したり処分する。

だけど、世の中には色々な趣味の人がいるようで、シンキローを専門としたコレクターは何気に多いらしい。彼らはネットの闇に潜んで、これまた闇の業者から商品を買って漁っている。市長がコレクターが収集業者のどちらにコネがあったのか……あまり深入りすることじゃないな。ともかくこんな抜け殻を用意するほど市長は『大松市復興計画』に本気なのだ。

抜け殻は人が入られるようコーティングが施された。麗奈さんがテキパキと内部を掃除して、手足をセット出来る定位置を作った。

初めて着た時は破れたりヒビが入るのではとおっかなビックリだったけど、さすがはシンキローの一部。妙な弾力で俺の全身にうまいことフィットしてくれた。

俺は実際のチワワの映像を観ながらこの日までトレーニングに勤しみ、本物そっくりの動きを体得した。まさか人間が操っているなんてシンキローの研究者だって夢にも思えないほどのな。

すいすいと狭い路地を抜けて、石炭資料館のある大通り（大松市基準）にたどり着いた。チワワの目の所にある空気穴から資料館前を見渡す。撮影スタッフに囲まれてアナウンサーとゲストのタレントが館長らしき男性と立ち話をしている。よし、まだ資料館には入っていない。

いつもならば歩いている人が両手で事足りる通りが、今日はテレビ撮影だけあって多くの野次馬で一杯だ。みんな団扇や携帯を片手にレビクルを取り巻いている。

しめしめ、これなら獲物に不自由しないな。

誰も路地からこっさり首を出した俺に気づいていない。無防備な背中を「襲ってくれ」と言わんばかりにさらけ出す。

さあ平和な生放送はここで終了、ここからは実況・恐怖のシンキロー襲撃の始まりだ。俺は勢い良く四肢を動かし、通りに飛び出した。

誰を狙う………考えるまでもない。若い女性だ！

この仕事を引き受けたのはバイト代だけに釣られたんじゃない。

女の子とイチヤイチヤ出来るからだ。しかも捕まる心配はほとんどなく、協力者がいて、その上報酬まである破格の条件だ。なんて素晴らしいんだろう。市長は「襲う対象については現場の判断に任せろ」と言っていたが、俺は最初から女の子しか眼中にない。

舌なめずりしながら獲物を物色……いたつ！　OLらしき女性発見。麗奈さんより色気はないが、その分若い。

脳内審査員よ、急ぎ容姿は判定するのだ……ピッピッ……『大変良くできました』だと。最高じゃないか！

歓声を上げたいところをグツと堪えて地を駆ける。

「ひっ！　な、なんだ」

「ぎゃっ！　シンキロー！？」

邪魔だ邪魔だ、男共。お前等には用はない。指をくわえて自分の無力さに打ちひしがれるがいいわ！

その時。なぜだろう。俺は如月市の駅前で希糸さんを初めて目撃した時のことを思い出した。あの時もこうやって目標に向かって走っていたっけ……そして、急に横から現れた人に……

「っ！？」

今度は避けられなかった。いくら訓練したとはいえ、慣れ親しんだ二足歩行と急ごしらえの四足歩行では勝手が違い過ぎた。俺は行く手を阻むように現れた人物と衝突してしまった。

「きゃああああっ！？」

狙っていたOLが、後背の気配を察知して黄色い声を上げる。それで野次馬だけでなくテレビクルーの視線まで俺に集まった。

くっ！ やっちまった。狙いが逸れた、すでにカメラもこっちを向いている。もう獲物を選んでなんかいられない。こうなったら！

ぶつかった人物は俺に踏まれて呻いている。こいつを襲ってシンキローの恐怖を全国に振りまいてやる。チワワの攻撃方法は、口から伸びる注射針ほど尖った触手で獲物の首もとを刺すこと。実際に刺すつもりはないが触手を当てるくらいのはしよう。

ターゲットは自分の顔面に両手を置いていた。それじゃあ首を狙いにくいと、俺はその防御を払いのけた。するとそこから

「一思いにぶっ刺してくださいね。情けなんて以ての外ですよ」
「・・・・・・・・」

おいでませ、希糸さん。

真夏の殺人光線をたくさん吸収する黒のロングスカートを着た彼女の顔に暑さによる疲れはない、それどころか襲われることを期待して頬をだらしなく緩ませている。

もう何であんたがここにいるの？ なんて野暮なツッコミはしない。この子は神出鬼没なのだ。俺のいる所どこへでも現れ、俺から得る痛みを貪欲に求めてくる。会ってから二週間、毎日の催促で「もう殴っちゃおうかな・・・・・・・・」と不意に思っっちゃうほど俺は

追い詰められている。

『何をしている、早くその子を人質にでも何でもして目立つんじゃ』
『!』

装着しているイヤホンから市長のお達しが届く。えええ、凄く気が乗らない。

どうしようかと悩んでいるうちに事態はさらに悪化する。

「だ、誰か助けてえ！」と救助を頼む第三の声。

んん！ 俺が下敷きにしていたのは希糸さんだけではなかった。足の一本にもう一人引つかかっている。どこかで見た短髪に少年のような半袖シャツにショートパンツ……

「あ、姉御」

「いやああ！ やめてっ……よう有明。出張ヒーローショーに司会役を連れて行かないなんて抜けているんじゃないか」

「も、もしかして」

「こ、こっちにこないでよおお！ ……お前らのやることしている事は全部お見通しだよ。きゃあああ！！ ……まあ、あり難く思いな、黙ってやるどころかあたし達も協力してやるよ」

「疲れませんか、その喋り方」

「もうやだああ、おかさああん……うつさい、これも陽之介くんのヒロインになるため。何の苦もないぜ」

なるほど。正体は明かせないとは言え陽之介に助けられるところを全国に見せつけたいのか。いや、どこぞの誰かが陽之介に救出されるのが我慢ならないのかもしれない。

今回の計画ではチワワ役の俺が市民に襲撃して、それをマツレンジャーに扮した陽之介が撃退するというシナリオになっている。マツレンジャーの中身が陽之介であることは当然極秘だ。何者かあのほほいランドの名物キャラクター・マツレンジャーを模倣したヒーローとなり、大松市民を助けた、そういうことにする。

かなり強引な目論見だが、リアルと言うか本物のチワワを使用したり、これから繰り広げられるド派手な対決アクションで説得力を持たせようというのが市長の考えだった……。しかし、市長……あなたの計画モロバレみたいすよ。計画の内容が控え室で語られた時、多分この二人は外からこっそり聞いていたんだ。よりもよってこの二人に。

「くっ」

落ち着け有明努、腹をくくれ。襲つ子が誰であろうとやるべきことに変更はない。訓練通りに行こう。

「努さん、私の柔肌にあなたの刻印を。さあもつと強く広範囲に」「有明よ、協力はしてやるがこれ以上私の身体に触ったら殺すからな」

市長、麗奈さん、陽之介、俺はもうダメかもしれないよ。だって訓練じゃ獲物があれこれリクエストしてくるなんて想定していないでしょ。しかも姉御と希糸さんで言っていることが間逆なの。もう俺一目散にお家に帰りたいの。

「GISYUUUU!!」

二人に暴力を振るうなんて出来るはずもなく、仕方なしにチワワの鳴き声を内部スピーカーから垂れ流しお茶を濁す。苦しまぎれの行動だったが、幸運にも周囲に緊張を走らせることに成功した。

「う、うわああああ!」
群集が蜘蛛の子を散らして逃げ惑う。それでいいのだ。たつぷり怯えて舞台に華を添えてくれ。

あとはヒーローの登場を待つだけ。陽之介、早く来てくれ。

「みなさん、ご覧ください。突如現れたシンキローに少女二人が襲われています。警察が急行していると情報が入っていますが、大松市には肝心のヒーローがいません。果たして少女達はどうなってしまうのでしょうか!」

遠くからアナウンサーの声がする。テレビクルー一行は避難したようだ。やれやれ、こちらとしては都合が良いけれど、大人達が少女のピンチに駆けつけないとは情けない話だよなあ。勝ち目がなかるうが、それでも動くことが好感度アップに繋がるのに。

何にせよ、このまま行けば計画は無事遂行出来そうだ。俺は体の下からする少女達の文句を聞き流しながら心穏やかにヒーローの到着を待った。

そして、ヒーローはやって来た。

「そのシンキロー! これ以上の非道は許しません!」

「ふえ?」

首を振って空気穴の向こうに何者かいないか確認するが、すっかり閑散とした通りがあるだけ。声の元はどこだ?

「努さん、上です上」

「おいあれって……」

希糸さんと姉御には見えているらしい。

「どれどれ」見上げて……「げっ」固まる。

「この世に蔓延るシンキロー、人々から笑顔を奪うにつくき悪魔！
そいつらから、天を！ 地を！ 海を！ 守る正義のヒーロー！」

電柱の天辺で複雑怪奇な手振りをし、踏み外せば即落下のスペース
で器用にステップを踏む少女が一人。

「魔法少女！ キサララ・フラワーズ。ここに参上！！」

太陽を指差す決めポーズで口上を終えたのは、以前見かけた如月市の
ヒーローだった。

一〇話 そんな俺と初めての实战

「この世に蔓延るシンキロー、人々から笑顔を奪うにつくき悪魔！
そいつらから、天を！ 地を！ 海を！ 守る正義のヒーロー！」

電柱の天辺で複雑怪奇な手振りをし、踏み外せば即落下のスペース
で器用にステップを踏む少女が一人。

「魔法少女！ キサララ・フラワーズ。ここに参上！！」

太陽を指差す決めポーズで口上を終えたのは、以前見かけた如月市の
ヒーローだった。ちなみに大松市や如月市の周りに海はない。遠
出上等と言うことなのかな。

少女はてるてる坊主みたいに三角形のドレスを着ている。ただし
味気ない白一色ではなく、フラワーズと言うだけあってユリやヒマ
ワリやランやカーネーションなど様々な花がプリントされて未来逝
っちゃってる服に仕上がっている

花柄って言葉で片づけられない物々しさ。一本に束ねた長髪は透
き通るほど麗しいが、本物の花がいくつも髪の間から顔を出してい
て芸術の奥深さを感じずにはいられない。新進気鋭が集まるファッ
ションショーか東京の一部でしか着れない凄まじいセンスだ。

この前チラッと目にした時は夜で服装がどうなっているのかハッ
キリしなかったが……これほど独創的に独走しているとは。
白日の下に晒してしまえば、なんつーか折角の近寄りがたい別嬪さ
んが別の意味で近寄りがたい人になってしまった。すごぶる残念で
ある。

「これって不味くないか、不味いよな」
姉御の呟きで我に返る。そうだ、奇抜な服に気を取られている場合じゃない。ほ、本物が来ちゃったんだ！

「二人を離しなさい！マジカルセンサーシヨンステッキ！」
フラワーズと名乗った女の子が腰にくくり付けていたステッキを手にする。チューリップを模倣したオモチャ売場にあるような物だ。

「伸びる！」
命令通り花びらの間から棒が伸びる。な、長い。電柱の上から垂らしたステッキの先端が地面に付きそうだ。

「はあああ……」
フラワーズとか言う魔法少女はステッキを大きく振りかぶった。さながら一打目を全力で飛ばそうとするプロゴルファー。ボールの位置には俺、希糸さん達を敷いた状態ですぐには動けない。

えっ、嘘。バカな真似はやめる。こつちにはか弱くはないものの一応女の子に分類される人達がいるんだぞ。

「チエストオオー！」
ナイスシヨット。

クラブもといステッキは的確に俺の横腹に命中し、抜け殻の重さも加味すれば八〇キロはある巨体をすくい上げた。もちろん下の二人にはまったく被害を与えずに。

「ぬうごおほ！」

小さい頃のこと。俺は空に憧れていた。風の中で自由に舞う鳥が羨ましかった。将来、僕は飛行機のパイロットになりたいです・・・
・・・そう作文に書いたこともあったっけ。良かったな、俺。パイロットにならずして空を飛ぶことが出来たよ。ほら、雲がいつもよりずっと近い・・・

「うぎゃん！」

でも人の夢と書いて夢い。空の人でいられたのは一瞬だった。俺は三〇メートルくらい飛行した後に不時着。機体に深刻なダメージありである。

「怪我はない？ 怖かったでしょ」

おぼろげになる視界の向こうで、電柱から降りたフラワーズが希糸さん達の手を取って起き上がらせている。

「ど、どうもありがとう」

「あ、ああ努さん。どうしましょ、今の一撃でMにでも目覚めちゃったら」

「えっ？ つとむ？」

「お、おい・・・なんでもないですよ。さ、さすが巷で有名な魔法少女。見事なお手前でした。じゃあ私達はこれで」

姉御が希糸さんを引っ張ってそそくさと後退する。フラワーズは訝しげに首を傾げたが、すぐに本業を思い出したようで俺の方にゆっくり進み出した。

「シンキローがこれくらいで倒せるわけありませんね。さあ、かかってくるさい！」

すんません、もう倒されたってことにしてください。ご期待には応

えられません。腹が烈火の如く痛いんです。今日のところはこれでお開きには出来ませんか？

「ん、死んだフリですか。甘いですよ、私が油断するはずないですよ」

進撃を中断して両足に力を込めて構えるフラワーズ。勘違いしてくれてサンキユ。身体が言うことを聞いてくれるまでそのまま置いてね。

抜け殻の中になかったら今頃内臓破裂で死んでいたかもしれない。抜け殻でもシンキローの一部。素晴らしい耐久性だ。

だが、魔法少女の力は姉御のヤキ入れの数倍上を行っている。地域の守護者として祭り上げられるのも納得である。あんなの人間技じゃねえ。これ以上攻撃を喰らえばシンキローの恩恵など焼け石に水、今度こそお空の上に連れて行かれそうだ。

『ザ……ザ……ザ……き、聞こえるか有明君』

「し、市長」

『おお、生きていたようじゃな。大丈夫か？』

「そう思いますか？」

『粗いテレビの画像でも見とれてしまうほど綺麗な放物線を描いておったぞ。早速、君のご家族宛に悲しいお知らせをしようかと思っただくらいじゃ。麗奈君の携帯電話に有明君の自宅番号が入力済みじゃった』

『後はダイヤルボタンを押すだけでした』

「ひ、ひでえ」

『そんなことよりアナウンサーが大興奮で実況中じゃ。全国に如月の市のヒーローの活躍が放送されておる』

「そ、そりゃあヤバいっすね」

『逃げる努力！ このままじゃ殺されるか、正体がバレて逮捕だ』
陽之介の助言には全面的に同意だ。逃げるしかない。

『うむ、君がやられたら如月市のヒーローの人气がさらに上がってしまふ。死ぬ気でバンまで戻ってこい』

バンまでか……。そう遠くない。一分もかからないだろう。だが、ワガママが言えるなら五秒が良かった。多分、それが本気になったフラワーズの追撃から我が身を守る最長時間。

「GISYUUU!!」

俺は威嚇しながらジリジリと後ずさる。

とにかく大通りから外れて路地裏へ。バンまでたどり着けなくてもテレビカメラからフレームアウトすればこの目立つチワワの抜け殻とおさらば出来る。フラワーズは正義の味方、中身が俺みたいなお者だと知ったら、「もうこんなイタズラは絶対にしないでください」と呆れながらキツク叱って許してくれるかもしれないしな。

「逃げる……いえ、誘っているのね」

フラワーズは慎重に前進する。用心深い性格の君が好き、そのままの君でいてね。決して覚悟を決めて突っ込んでこないでね。死んじやうから俺。

細い路地に身体が入りそうになる。

「くっ」

焦りの色を見せるフラワーズ。大通りで戦えば周りの野次馬に被害が拡大するかもしれない、だが路地はシンキローのテリトリー。さあ戦闘フィールドはどちらにするか……。迷えるフラワーズの考えは手に取るように分かる。と、次の瞬間にフラワーズは俺の手から抜

け出し奇妙な行動をする。

「……なっ、なにこの反応」

こちらの一拳手一投足を見逃すまいとしていたフラワーズの注意が別の所へ向いた。道路を挟んだ反対側、野次馬が集まる一帯に首を回す。

フラワーズが何を感知したのかはさだかではない。でも、これが最大の好機であると直感した。俺はくるっと反転して渾身の力を手足に注ぎ走り出した。

「ま、待ちなさい！」

待てと言われて待つ奴はいない。パンツくれたら待ってもいいけどな。

直ちに追跡して来ると思われたフラワーズだが、足音は聞こえてこない。新たなトラブルが見舞われたのだろうか。まあいい、俺が気にするべきは無事に逃げおおせることだけなのだから。

路地裏をひたすら四足ダッシュ、次の角を曲がってもう一度真っ直ぐ行けばゴールだ。バンの中でみんなが待っている。イケル、イケルぞ……と行くほど人生は平坦ではないことを俺は忘れていた。

「ここが終点です、覚悟」

曲がり角の先にフラワーズが仁王立ちしていた。あ、ありえない…
…追ってくる気配なんてしなかったのに。どうやって？

急ブレーキをかけて頭に？を浮かべる俺に、親切なフラワーズは
答えを実演してくれた。

「たああっ！」

フラワーズが飛んだ。跳んだにしては飛距離がおかしいので飛んだ
で正解だろう。狭い路地裏でも上は空まで続く広さだ。フラワーズ
は天高く飛び上がる。

俺はポカンと首の角度を上げて、彼女の動向を見守る。

そうだった。あの子は屋根走りしたりビルに登ったりと驚異的な
ジャンプ力を持っていた。なるほど、いつの間にか俺は飛び越えら
れて先回りされていたんだ。

彼女の上昇は左右にある雑居ビルの背丈でようやく止まり、後は
自由落下に身を任せることになった。降下しながら剣道で言うところ
の上段の構えをするフラワーズ、竹刀の代わりはあの珍妙なステ
ッキである。落下エネルギーを合わせた打ち下ろしか…

否応なく如月駅での戦闘が脳裏をかすめる。あのシンキローの脳
天を粉碎した攻撃だ。

シンキローが耐えられなかったものを人間の俺が耐えられるはず
ない。

うん。

俺、死ぬね。

一一話 そんな俺と白のパンツ

何度も言うが狭い路地。

あの規格外れの得物を避けるにはどうすれば良いのだろう。多分「伸びろっ」の掛け声でステッキの先はもっと長くなるはずだ。後ろに下がって済む話じゃない。

だったら横に、そう隣の建物に貼り付いてかわすしかない。

俺は即断した。しかし……だ。脳は選択したのに身体が、心が着いてこなかった。

人生には己の命をドブに捨ててでもやらなければならない事がある。俺の本能はそれをよく理解していた。

フラワーズの格好を検証してみよう。

彼女は魔法少女らしくフリルな衣装を着ている。下半身はひらひらのドレス、決してジーパンなど情緒を度外視した物ではない。そんなフラワーズが空から降りてくる。すると何が起るのか……言うまでもない。

見えてしまうのだ。

え？ 何がって？

決まっているだろ！ 少女の秘密の花園だ！

「白か」

ふふふ、斬新なコスチュームをしていても大切な場所は王道を貫くか。嫌いじゃないぜ、その精神。

パンツ觀賞をしている間に殺気を含んだ魔法少女は目と鼻の先まで接近していた……が、だからどうだと言うのだ。パンツの前では取るに足らないことじゃないか。さあて見るだけで満足してはいけない。人間、向上心が大切だ。

ステップ2・触れてみましょうに進もう。俺は後退も横移動も選ばず、フラワーズの着地地点を目指し……前進した。

「えっ！ し、しまった!？」

煩惱に支配された故の動作はフラワーズにとって完全に虚を突くものだったらしい。振り下ろされるステッキは空を切り、地面に当たって亀裂を走らせる。そして、少女のお尻は俺の顔へと吸い込まれていった。抜け殻内に大きな衝撃と痛みが走る……が、そんな事よりパンツだ。少女の温かさが浸透したパンツ、人類の至宝。ついに我が手に……手に……手に……ん？

「ああっ!」

抜け殻越しではパンツの感触が得られない。肝心の俺はチワワの皮と肌を重ね合わせているだけ。な、なんて事だ。早く脱がなきゃ!

「いたたっ……きゃあ! 何してんのよ変態シンキロー!」
フラワーズがドレスの下でもぞもぞしていた俺を感知して素早く飛び去る。

「こらっ、まだ脱衣中なんだから座っていなきゃダメじゃないか。もう仕方ないな、と俺は憤慨しながらお腹のチャックを開けようとした。

「ん！ んんっ！」

ちよつとタイム。チャックが噛んじまったようでビクともしない。

あれ、あれえ………

「乙女の純情を汚すシンキロー！ 絶対に許さない………絶対に」

おや、フラワーズの肩が静かに震えている。メラメラと魔法少女の周りの空気が焦げ臭くなった気がする。

「マジカルセンサーシヨンステッキ、エッジモード」

路地一杯に伸びきっていたステッキが一瞬で縮んだ、と思っているうちに先端の棒が反り返った刃物へと変化した。ステッキよりナギナタと呼んだ方が適切だ。

フラワーズは腰を深く沈めて、呼吸を整える。ナギナタの切っ先は寸分変わらず俺を標的としてマーク。何という凄み、本気で殺しにきやがった。

「瞬きの暇があるとは思わないことです」

「わわわ！ やめてくれっ」

壁に抜け殻を擦らせながら俺は何とか二本の足で立ち上がり、両手を高らかに上げて降参する。

「俺はシンキローじゃない。人間だっ」

「へ、へえ驚きです。まさか人語を喋り人間のような動きが出来る

シンキローがいたなんて」
目を見開くフラワーズ。だが、その目は節穴だった。

「信じてくれよお、俺は真正銘の地球人だって」

「おぞましいその身で世迷い言を！ 見苦しく命乞いするくらいなら始めから地球に来なければ良かったのに」

「これは確かにシンキローの抜け殻だけど、中身は純一〇〇%の大松市民っすよ！」

「何を証拠に」

「ほら、ここをよく見てよ。ファスナー付いているでしょ。着脱可能なんっすよ」

「そう言っただけで私が近づいて確認する所で攻撃を仕掛けるのですね。その手には乗りません」

くうう、頭の固い奴め。ならば……………

「しろ！」

「い、いきなり何を？」

「あんたのパンツの色だ。どうだあ、普通のシンキローが女の子のパンツに興味を持つはずが」

「死死しいいねええええ！」

神速のエッジによる大上段からの攻撃。回避なんて無理な話だった。フラワーズの宣言通り、瞬きしている間の出来事である。

「あ、あ……………」

俺はふらふらと後ずさる。ダメだ、致命傷だ。

「……あつぶねえ」
もう少し距離が詰まっていたなら、だけど。

フラワーズの攻撃は抜け殻をかすって通過した。喰らっていたら真つ二つだった。

「ちっ、怒りで間合いが狂ってしまいましたか。次こそは息の根を止めてみせます、この変態男」

「いま男って言ったよね！ 人間だって認めてくれるんだよね！」

「黙りなさい。もうシンキローか人間かの問題ではありません。一変態を成敗するために私は正義を振ります」

フラワーズめ、決意を凝り固まらせてやがる。もはや言葉は通じないってわけか。

フラワーズに対応する戦力は本邦に存在せず。万事休すだ。

その時、一筋の光明がチワワ内に入り込んできた。今の攻撃で抜け殻に切り口が出来たのか……これなら！

「ふふふ、フラワーズよ。お前は緩いな。まんまとこちらの罠に引っかかりやがって」

「罠ですって？」

「敵が俺一体だと思ったとき。おい今だ！」
フラワーズの背後に呼びかけた。

「なっ!？」息を呑み、フラワーズは振り向く。

「……だ、誰もいないじゃない。どういふこと……
つてやられた!？」

素直なフラワーズ、もつと人を疑うことを知るのだな。疾走しながら心の中で忠告する。

路地を逆戻り。角を曲がった所で俺は抜け殻の切り口に両指を突っ込み思いつきりこじ開ける。ぬちゃあという気味の悪い音と共に風が吹き込んでくる。夏風は湿気にまみれて爽快さゼロなのだが、蒸しに蒸しまくった抜け殻から解放された俺には心地よい。

抜け殻を脱ぎ去って、裸足でスタコラ爆走。よし、この調子で

「大通りに戻って人混みの中に入ってしまえばもう捕まる心配はない、と思っっているのですか」
背中に衝撃が走った。押された、いや蹴られた！ 受け身を取ることも出来ず前のめりに地面と擦れ合う。熱くて痛い。

「一般人の鈍速で私から逃げられるわけないでしょう。それに……
……何ですかその格好。私が捕まえなくても警察が捕まえますよ」

格好？

そう言えば股間の所が妙にスーサー風通しが良い……
つ。怪人役を始めた頃から中の人である俺の服装は、断固白の下着とパンツ一丁と決めていた。少しでも涼しくいるために……
・それは今回の抜け殻でも同じ。この身なりに加えて今は汗だくだ。色々透き通っており、どこに出しても恥ずかしい変態に俺は成り下がっていた。とても大衆に混ざれない。

「お分かりでしょ。あなたに逃げ道はありません」

「うつつ、グスグス……何でこうなっちゃうんだよ」

計画なら今頃、市長から成功報酬をもらってウハウハだったのによ

お。どうして世の中ってこう上手いかずに理不尽なんだろう。地に顔を付けたまま男泣きしちゃうじゃないか。地

一二話 そんな俺と悲しき再会

情けない姿をこれでもかと晒す俺にフラワーズは嘆息した。

「……………まあ、私も鬼ではないです。その無様な姿には哀れみを覚えてしまいますし……………仕方ありませんね、市民の皆様には謝れば許してあげましょう」

「ほ、本当っすか!？」

「ええ、ちゃんと誠心誠意頭を下げるんですよ」

「もちろんですとも!」

この世には神も仏も女神もいたんだ。もう市長の計画を暴露することになってもいいや。命が何よりも大事だしな。

俺はひりつく体を我慢して起こし、立ち上がった。うわっ、涙がなかなか止まらない。泣き顔をフラワーズに見られるのは照れ臭い。腕でごしごし拭って……………よしもう大丈夫だ。

「ありがとうございます。俺、凄く反省しています。申し訳ありませんでした」

フラワーズと顔を合わせて心から謝る。

「はい、よく出来ました。その調子で他の方にも謝罪するんですよ。俺の予想ではフラワーズの次の言葉はこうだった……………が。」

「……………あ、あなた」

俺の素の顔と初対面したフラワーズは、目と口を大きく開いて仰天

している。

「え、ふ、フラワーズさん。震えていますけどいかがしました？」

「あなた……あなた……ああんんたあああ！
！」

「うっひい！ 卑しいわたくしめが何かあ」

「トトトオオムムウウじゃないのおお！！」

と、トム？ 俺のことか？ それって最近誰かに付けられたあだ名
だったような……

「……やっと見つけた。やっとやっと……ここでえ会ったが
あ百年目ええ！」

「ちょ！ なに武器を構えなおしてるんすか！？ ゆ、許してくれ
るんじゃ……あっ」

改めて目に留まったステッキには、中程にストラップが結ばれてい
た。猫のキーホルダー……ってあれは何時ぞやのラッキーアイテム。
シブヤに取り込まれた時になくしたと思っていたのに、何でフラワ
ーズが持っているんだ？

「ごめんなさいで済めば魔法少女はいらないのよ。あたしをこんな
身体にした罪、あなたも身体で償ってよね」

「か、身体ツスカ。何のことか分からないし、いきなり言われても
心の準備が……あの……その……は、初めてなんで優しく
お願いします」

「うがあああ！？ もうお前黙れ、今すぐ息の根を止めてやる！
正義の味方としての気品を綺麗さっぱり失ったフラワーズが大地を

蹴った。コンマの世界で事を成し終える神速だ……蹴った
大地が俺の汗でべっとり濡れていなければ。

「ぎゃわああ！」

フラワーズが滑った、コメディアン顔負けの滑っぷりだった。なま
じスピードがあるので姿勢を制御出来ず、つんのめる。

俺の方に向かって。

「ぐへえっ！」と巻き込まれ、俺はフラワーズ共々地面に転がった。

「……ぐむう」

緒突攻撃にしばらく動けなかった。仰向けになって路地裏の上にあ
る狭い空に意識を飛ばしていた。だが、なんだろう。だんだん身体
の機能が回復してくると股間部に重みを感じる。

「つつ……なんだあ？」首を曲げて下半身に目をやると……
……俺のパンツに顔を突っ込んだまま微動だにしないフラワー
ズがいた。

俺のパンツはただいま洪水警報と男臭注意報が発令されている。
その中に正義のヒーローとして人一倍五感が研ぎすまされているだ
ろうフラワーズは突入してしまったのだ。そうならばどうなるかは
悲しいくらい分かった。

「哀れな……」

今し方自分に向けられた言葉を返す。フラワーズよ、安らかに眠

っ
てくれ。

倒れたまま、股間の少女へと静かに黙祷した。

「有明さん！ どこにいるのですか」

「おーい、努！」

一分ほど黙祷していると、路地の先から麗奈さんと陽之介が慌てた様子で現れた。

「……」

そして二人は沈黙した。

下着姿である俺、その股の間に埋まるフラワーズ、珍妙なダブルノックアウト現場である。

「常人の私には理解できないプレイが展開中なのですが……」

「お前と言う奴は。根は悪く人間として腐っているが、それでも最低限の常識は持ち合わせていると思っていたのに」

「ふっふっふっ、遅いですぞお二方」

俺は上半身を立て直した。フラワーズにはもう少し俺の秘部を満喫させてあげたいので、下半身はそのままにする。

「見られよ、世紀の伊達男・有明努にかかれば、今をときめくフラワーズなんぞ大した敵じゃない。それをついつい証明してしまった、はっはっは」

「フラワーズ？ お前は何を言ってるんだ」

「何って、今こうしてフラワーズを倒しているじゃないか」

「有明さん。話が見えませんかよ。プレイのパートナーがフラワーズの関係者だとおっしゃりたいのですか？」

「関係者ってどう見ても本人……え？」

目を疑った。改めて視認するフラワーズはフラワーズではなくなっていた。

服装はフラワーズだが、中身は小さい少女。ぶかぶかになったフラワーズのコスチュームから飛び出ているのはどこかで見たニンジン頭。

「青空………五花？」

顔を持ち上げると白目をむいた女の子。

夏休み初日に会った、シンキローに仲良く取り込まれたあの少女だった。

二三話 そんな俺と染み込むカラシ

「ご、ごめんう、バケツなうかああ」

目を覚ました五花が始めに口にしたのはこの言葉で、言い終わらないうちに吐き出した。先見の目がある麗奈さんが傍にいなかったら上質な羽毛布団と畳が大変なことになっていただろう。

「いいんですよ、辛いこともキモいことも全部吐き出しなさい、物理的に」

バケツに首を突っ込む五花の背中をさする麗奈さん。

「おええええええ」

見ていて気分の良い光景ではないので、俺は視線を変えた。

客間の外には手入れの行き届いた日本庭園が広がる。ムダ毛のない整った木々。格式張った岩。竹の切り口に水を流し重さで竹を岩に叩きつける、いわゆるししおどしまである。

さすが市長の家、風流と金の臭いがプンプンするね。

「落ち着いたかね、青空五花くん」

「う、うん。その、ありがとうございました」

「ふむふむ、ちゃんとお礼が言えるとは礼儀正しい子じゃ。君が気絶している間に失礼とは思ったがワシの家まで運ばせてもらったよ。あそこにいたらいつマスコミが押し寄せてくるか分からんからの」

市長邸。

大松市の中心から少し山側に行った所に建つ豪勢な日本建築である。その客間は俺の部屋の三倍の面積を誇り、踏み心地がよい畳が敷かれている。クーラーはガンガン稼働しており、真夏日でも五花は羽毛布団の柔らかさに癒されている。

「服の方はどうかね？ 急遽買い揃えた物だからサイズが合うかな」

「だ、大丈夫。あの……これは……」

「心配せずとも着せたのは麗奈くんじゃ。男共は席を外しておいた」

「子どもの着替えシーン見ても仕方ないしな」

「と、トム！ あんた一度ならず二度も、よくもよくも」

ようやく俺に気づいた五花が、かけられた毛布を蹴飛ばして起き上がる。

「病み上がりが無理すんな。また俺の股間に帰りたいと言っなら話は別だけだな。へい、カムバツク」

「う、う……う……うおおおええええ！！」

「情けないぜ。俺自家製のフェロモンを受け付けないとは、まだまだお子ちゃまめ」

「有明さん、それ以上この子をからかうのでしたら、あなたを殺菌処分しますよ」

「調子に乗ってすみませんでしたあ。先ほどの全身タワシの刑で十分反省しております。これ以上はご勘弁を」

赤く腫れる身体を地に伏せて土下座する。凄くヒリヒリするよ。

「馬鹿は放っておいて……青空くん。そろそろ教えてくれるかの。どうして君がフラワーズとして活動しているのか。どうやって力を手に入れたのか。気になることはたくさんある」

「そ、それは……」

再び麗奈さんの手で病床に戻された五花は言葉を詰まらせ、なかなか話を進めない。

「もちろん他言無用じゃ。ワシと麗奈くん、ついでに関係者っぽい有明くん以外はここにはおらん」

「……分かったよ。でも絶対に誰にも言わないでね、絶対だよ」

「もちろんじゃ」

「はい、信用してください」

大人たちが柔和な顔をする。五花は安心したようで表情を綻ばせた。

あどけないねえ。後ろに組んだ市長の手が密かにガッツポーズを取っていたのを見て取った俺には、この口約束がちり紙以下の効果しかないと思えてならない。懐のさぐり合いが生業の政治家の話を鵜呑みにしてはいけないのだ。市長も麗奈さんも一癖二癖ある人物だとここしばらく一緒にいる俺は感じ取っていた。

「フラワーズになったのは先月の、後半くらいだったかな。初めて如月市にシンキローが現れた日」

「俺たちが取り込まれた日か」

「そう、あたしを巻き込んでトムが無理心中を計った日」

声に皮肉と恨みがたつぷり乗せられている。小さい体格で小さいことをいつまで気にしていたら人間の器まで小さくなっちゃうぞ。

「スライムみたいなシンキローに取り込まれたあたしは一度気絶したんだけどさ、身体の底から沸き上がってくる衝動、というのかな……そんな溢れるパワーで目を覚ましたの。周りはスライムから逃げまどう人たちが大混乱していた。立ち上がったあたしは、この場を離れなきゃと思いつつ隣で寝ていたトムの頭を踏んづけた

の。そうしたら目線がいつもより高くなっていたんだ」

「その時にはもうフラワーズになってたんじゃな」

「うん。商店街の窓ガラスに映った自分の姿を見つけてビックリしちゃった。スタイル抜群の大人になっていたんだから。ほんと何が何だか分かんない、とりあえずトムを小突きながらパニックになっていたあたしだけどさ、一つだけ分かることがあった。今のあたしならシンキローを倒せる……理由はないけど、不思議とそう思えたの」

「無意識にヒーローとして覚醒したと言うことかのう」

「これまでヒーローが誕生した市町村はシンキローに襲撃を受けています。もしかしたらあの学説は正しいのかもしれない」

「あの学説……とな？」

「学説と呼ぶにはかなり荒唐無稽なものですが、体内の抗体がシンキローに反応したという説です」

「抗体が反応？」

「五花が小首を傾げる。」

「簡単に説明しましょう。私達の身体には病原体の侵入に対して防衛機構が存在します。それが抗体です。抗体は病原菌と反応して、病原菌の毒素を中和することが出来ます。病気に免疫が持てるのもこの抗体はしっかり働いているからです」

「麗奈くんはその抗体がヒーロー誕生の鍵になると言うのかね」

「シンキローが人間から栄養を吸収しようとした場合、青空さんの時は全身をシンキローに覆われたそうですが。その際にシンキローの中の菌が青空さんの中に流れ込み、菌に抗体が反応し、免疫行動を取った。未知なる菌を除去するため抗体は通常以上に活性化し、

身体のバランスが崩れ、特異的な反応が積み重なり、行き着いた先がヒーロー……というのが説の大まかな内容です。シンキローの異常な回復性がヒーローの攻撃だけ発揮されないのは、抗体を持ったヒーローがシンキローの細胞活動を阻害しているなど妄想じみた話もこの説にくっ付いています」

「免疫で力が向上したり、青空くんのように体格が変わるなんて何とも信じがたい一説じゃな。ううむう……だが、同じく襲われた有明くんはヒーローの兆候はないようじゃないか」

「ヒーローになれるのは選ばれた者、と言っことでしょ。DNAは人それぞれ、同じ免疫反応を辿るとは限りません」

「なるほどのあ、有明くんはどう思う？ さっきからずっと黙り込んでいるようじゃが」

「五花……」

自分の声が冷えきっている。たぶん今の俺はこれ以上ないくらいシリアスな顔つきになっているだろう。

「お前は大切なことを喋っていないな」

「と、トム？ 怖いよあんだ。あ、あたしが嘘を言っているというの？」

「嘘じゃない。あえて語ろうとしていないことがあるだろ」

ヒーロー誕生の謎という小難しい話に興味はない。俺が知りたいのはただ一点。

「何さ、トムを小突き回したことから謝らないよ。当然の報いなんだから」

「そんなことはどうでもいい！」

「えっ？」

「俺が、俺が聞きたいのは……」

「ごくりと一度喉を鳴らし、俺は言った。」

「フラワーズの衣装だ！」

「はい？」

「あの独創性が暴走したような服は、フラワーズになった直後から着ていたのか？」

「あたしのコスチュームになんて言いぐさ！ あれは徹夜して一生懸命作ったお手製なのよ！ 凄くカッコいいじゃない」

「お前のトチ狂った美的感覚は置いとくとして………ほうほう、つまり初めてフラワーズに変身した時。お前の服は子どもサイズだったわけだ！」

「はうつ、ちよつとま」フラワーズのスタイルは脱帽レベルにグツドだ。それは認めよう。あのボディが五花のちっばい服に包まれていたらどうなるか」

「グツドか………ってそうじゃない。想像しないでよエロトム！」

「胸やお尻がさぞ自己主張しただろうな。えへえへ………くそつ、なんで俺は気絶していたんだ。一生の不覚！」

「失礼します」

背後に麗奈さんの声。

嫌な予感が全身を駆け巡るより早く、麗奈さんの手が俺のシャツ

の中へ潜り込む。ひんやりとした麗奈さんの手、あつ気持ち良いと思つた直後にそれはやつてきた。

「……………あ、ああああああ、ぎゃああああ！…せ、せなががああ」

「カラシを塗りたいくなりました。腫れた皮膚には堪えるでしょう。ゆつくり苦しみながら反省なさい」

「な、なぜカラシをじよ、常備いいい！し、しみるううう」

ぶつ倒れて畳とお近づきなつた俺はもがきにもがく。すつ／＼くペリペリするよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7203v/>

そんな俺らはご当地ヒーロー

2011年10月10日14時28分発行